拔萃

高等

小學唱歌

國定教科書準據

諸教科統合

第一學年

40979
教科書文庫
4
1760
31-1914
01304
49462

東京高等師範學校教諭 大橋銅造
學習院教授 納所辨次郎 共編
東京高等師範學校教諭 田村虎藏

拔萃 高等小學唱歌

第一學年

發賣所 株式會社國定教科書共同販賣所

中央図書館

広島大学図書
0130449462

緒言

一、本書は、高等小學校唱歌科教師用及兒童用として、明治四十一年八月五日、文部省檢定濟となりし『高等小學唱歌―第三・四學年』の教材中より、現今の唱歌教授に、最も適切なるものを拔萃して、各學年毎に合本したるものなり。

二、教材は、之を各學年各學期に配當し、序を追ひて教授するに適せしめたり。

三、歌詞の假名遣が、現行小學讀本と一致せざる所あるは、當初、文部省の檢定を經たるまゝを襲用したればなり。實地教授の際、其の心して取扱はれんことを望む。

四、當時の高等小學第三・四學年は、即ち、現今の高等小學第一・二學

年に相當せり。されば、今回の拔萃合本を期として、其の名義を改め、以て、彼此の混同を避けたり。

五、本書出版以來、年既に久しく、夙に、絕版の狀態にありき。しかも江湖の需要、今猶衰へずして、之が供給を希望せらるゝこと、其の數少からず。此を以て、本發行者は、本書を複製して、此の要求を充たさんことを謀り、編者と原發行者との同意を得て、玆に、此の合本を刊行するに至れり。一言を附して、其の由來を述ぶること此の如し。

大正三年四月三日

編者識

高等小學唱歌

第一學年

目次

第一學期

一　樂しき我家……三
二　三種の神器……五
三　協同一致……七
四　韓國旅行……一一
五　橘　媛……一五
六　鴻門の會……一七
七　揚子江……一九
八　象……二三
九　遣唐使……二六

第二學期

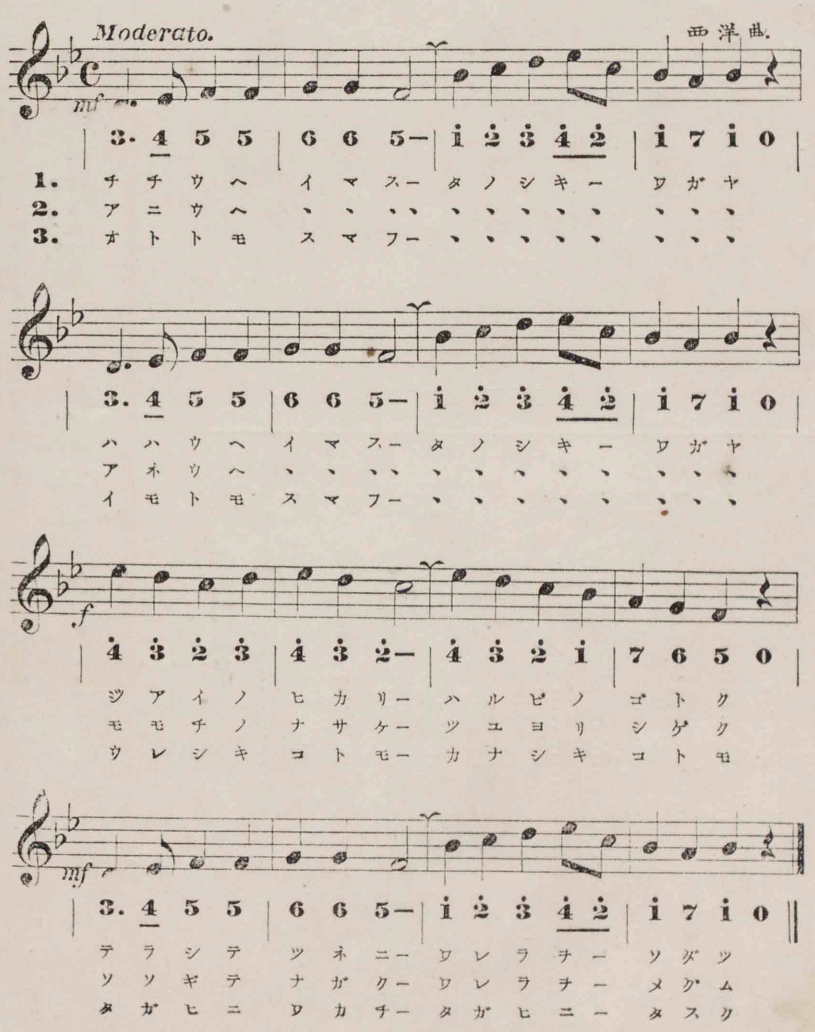
一〇　世は相持……二九
一一　ニュートン……三一
一二　間宮海峽……三三
一三　和氣清麻呂……三五
一四　開　墾……三七
一五　ワシントン……三九
一六　慈　善……四一
一七　俊寛僧都……四三
一八　サハラの大沙漠……四六

第三學期

一九　コロンブス……五〇
二〇　初　雪……五二
二一　公　德……五五
二二　ナイヤガラ瀑布……五八
二三　武士道……六一
二四　奉天會戰……六四
二五　阿新丸……六六

樂しき我家

（子拍四調ろ變）



樂しき我家

大和田氏

第一章

父上います樂しき我家、　母上います樂しき我家、
慈愛の光、春日の如く、　照らして常に我等を育つ。

第二章

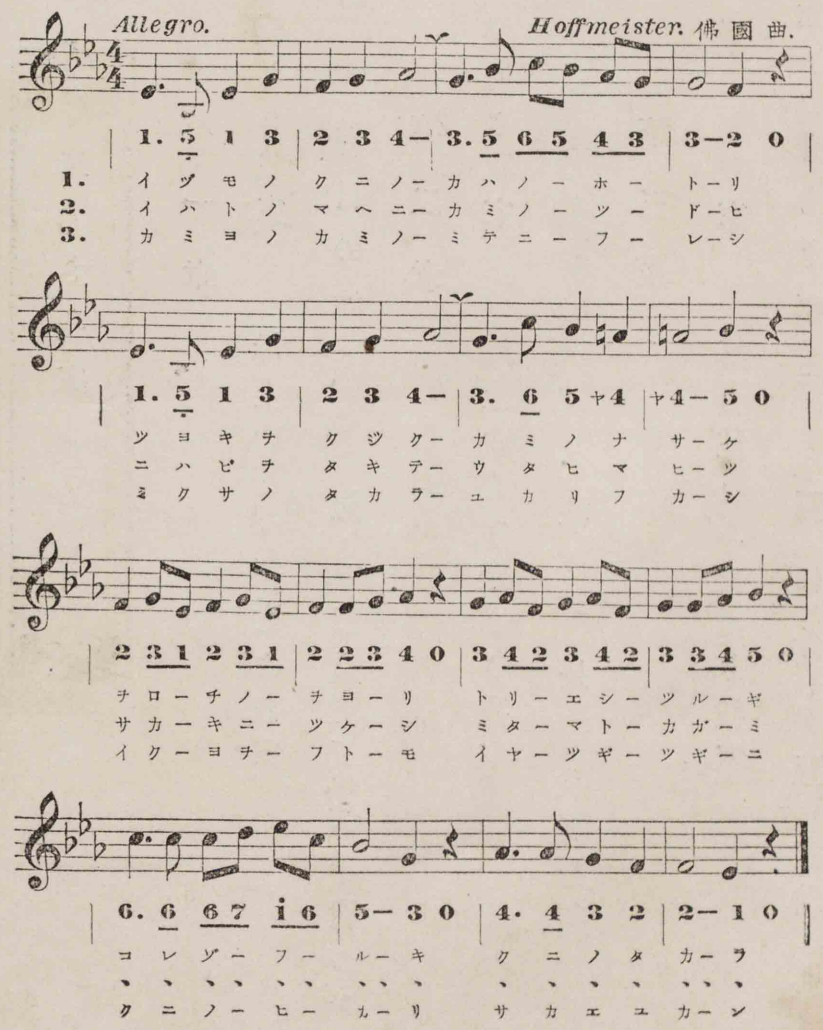
兄上います樂しき我家、　姉上います樂しき我家、
百千のなさけ、露より滋く、　注ぎて長く我等を惠む。

第三章

弟も住まふ樂しき我家、　妹も住まふ樂しき我家、
嬉しき事も、悲しき事も、　互に分ち互に助く。

三種の神器

（變ホ調四拍子）



三種の神器

蘆田氏

一、出雲の國の　川のほとり、
　強きをくじく　神のなさけ。
　大蛇（をろち）の尾より　とり得しつるぎ、
　これぞ、ふるき　國のたから。」

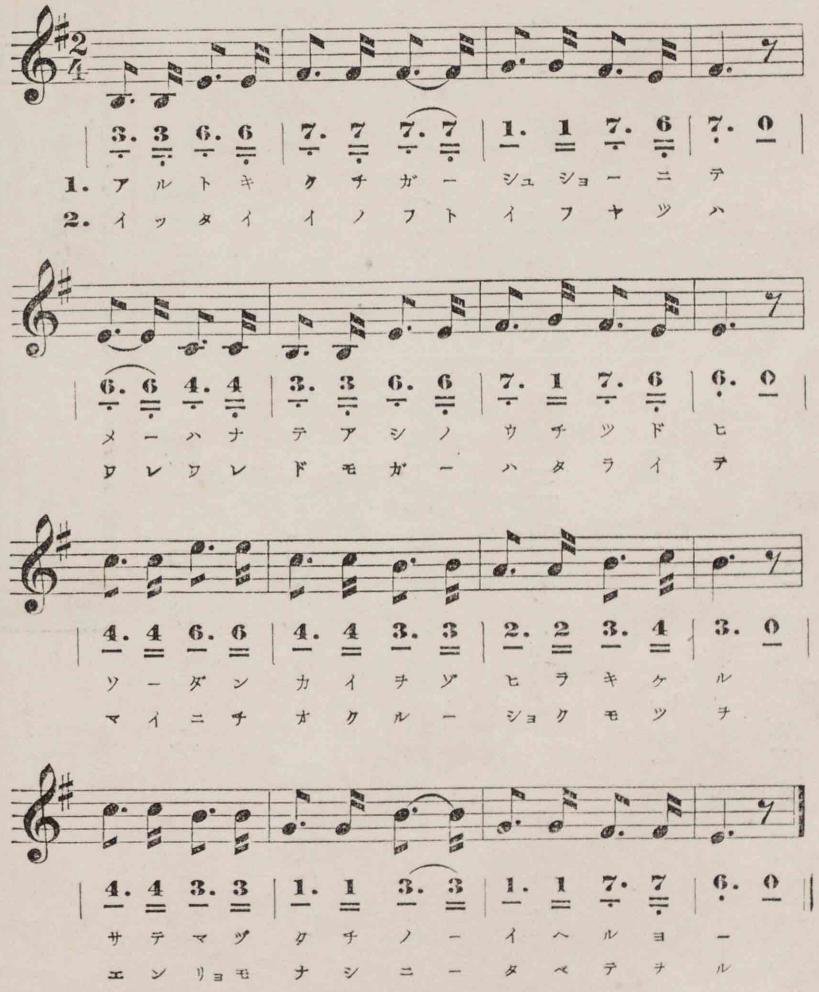
二、岩戸のまへに　神のつどひ、
　庭火をたきて　謠ひ舞ひつ。
　榊につけしみ玉と鏡、
　これぞ、ふるき　國のたから。」

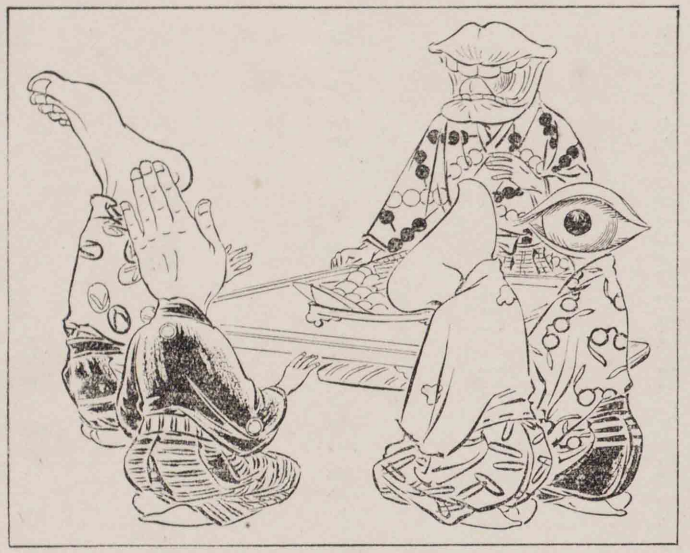
三、神代の神の　み手にふれし、
　三種（みくさ）の寶、ゆかりふかし。
　幾世をふとも　いや、つぎつぎに、
　國のひかり　榮え行かん。』

協同一致

（ほ短調二拍子）

淋シゲニ　　納所氏





協同一致

石原氏

一、ある時、口が首唱にて、
目・鼻・手・足のうち集ひ、
相談會をぞ開きける。
さて、まづ、口のいへる樣。
二、「たい、胃の腑といふやつは、
われ〳〵どもが働いて、
毎日送る食物を、
遠慮もなしに、食べて居る。」

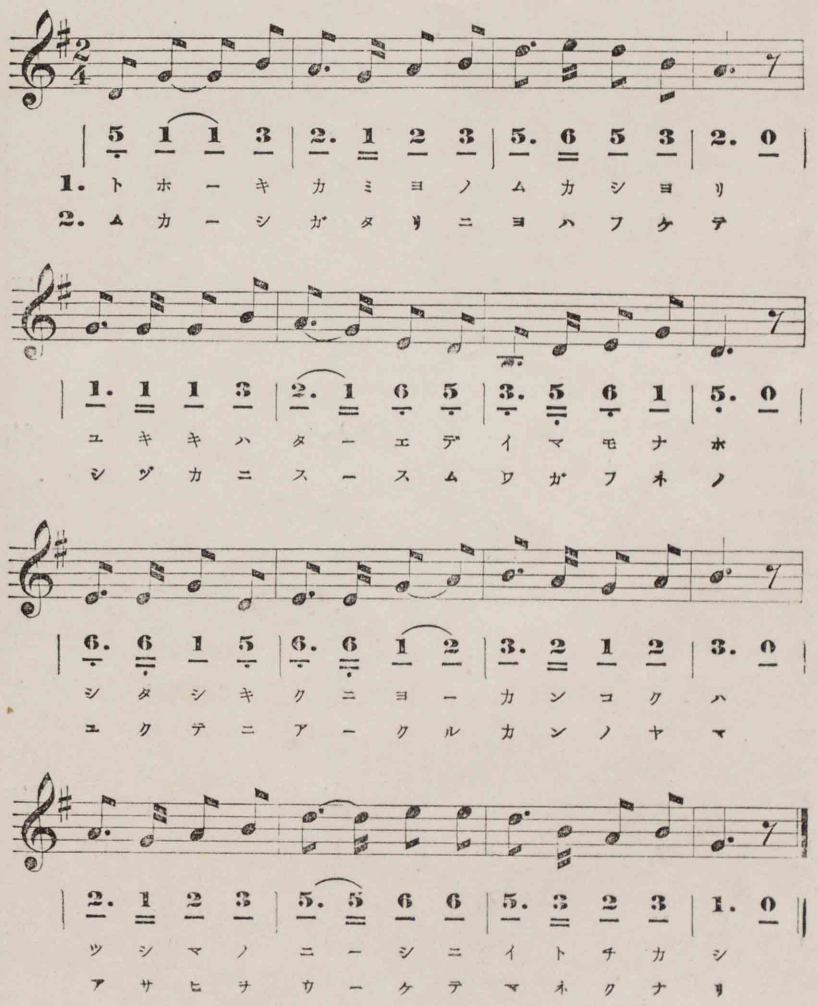
三、われ〳〵どもは胃のために、
　その働をやめにして、
四、みな〳〵げにもと同意して、
　足、食堂に行くをやめ、
五、かくて、二、三日たゝぬ間に、
　耳は鳴り出す、目はくらむ、
六、この時、胃の腑いへる樣、
　自業自得といひながら、
七、諸君のおくる食物は、
　その血は五體に送らるゝ、
八、手足をはじめ耳・鼻は、
　此後は胃の腑をうらやまず、

　むだ骨を折る。今よりは、
　胃の腑に、つらきめを見せん。」
　目は物を見ず、鼻かがず、
　手は、箸をだにとりもせず。」
　體は自然に衰へて、
　手足はなゆる、いかにせん。」
　諸君が、今さら苦むは、
　もの、道理を知らぬ故。」
　われら夜晝消化して、
　これぞ互のためなれや。」
　このことわりに夢さめて、
　互のつとめをつくしけり。』

韓國旅行

（ト調二拍子）

快活ニ　　田村氏



韓國旅行

蘆田氏

一、遠き神代の昔より、
ゆき來は絶えで今もなほ、
親しき國よ、韓國は、
對馬の西にいと近し。」

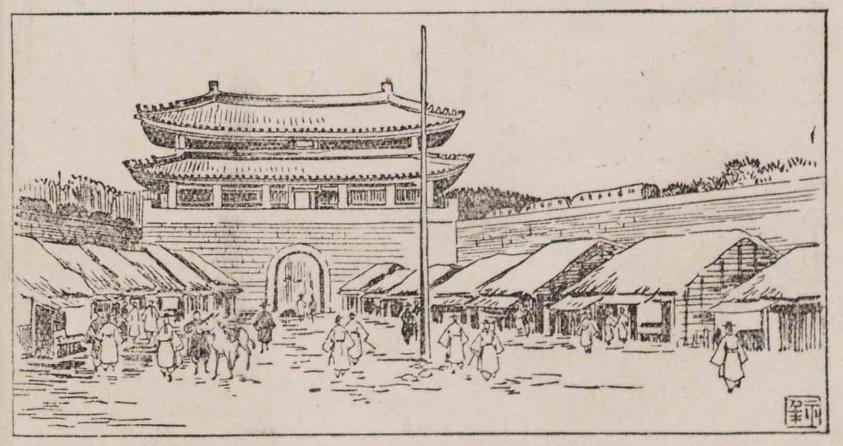
二、昔語に夜は更けて、
靜に進むわが船の
行くてに明くる韓の山、
朝日を受けて招くなり。」

三、ながめも飽かぬ絶景の
島の景色を惜みつゝ、
進みておろす碇こそ、
釜山港とておと高し。」

四、京城までは遠けれど、
開け行く世の嬉しさは、
牙山・安城、時の間に、
汽車のながめの飽かずして。」

五、さても、都に來て見れば、
八門城壁いかめしく、
鐘路の北に、宮城の
高く見ゆるも尊しや。」

六、都を去りて仁川に、
向ふも近き汽車の道。
しげき出入の船見ては、
港のさかえ思はるゝ。」



七、碧蹄館に、平壤に、
血汐そゝぎし跡とへば、
月、心なく輝きて、
水、心なく流るなり。」

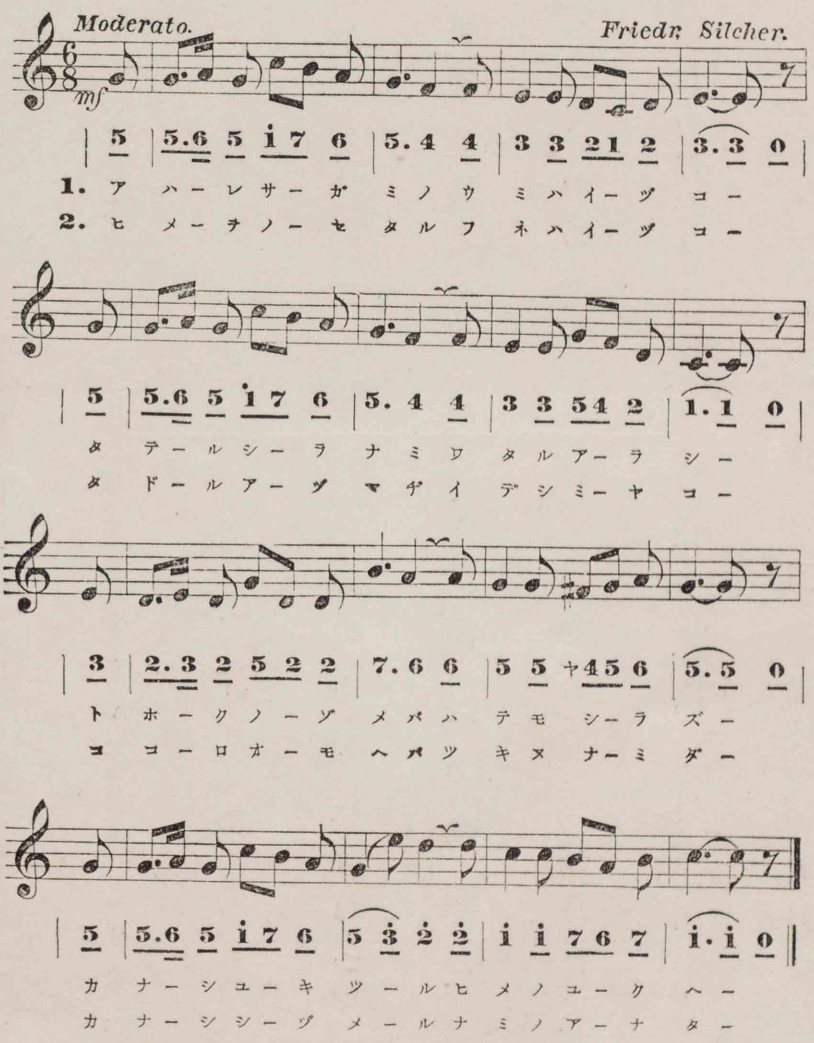
八、京義鐵道、乘り終へて、
鴨綠江をさかのぼり、
更に山路をわけ行けば、
白頭山の峯高し。」

九、元山津に船まちて、
やうゝ釜山に歸り來ぬ。
蔚山沖の戰場を、
心のあてに、尋ねつゝ。」

一〇、我國民の韓國に、
盡せるわざの蹟見れば、
長き旅路も外つ國の、
思はなくて、なし終へつ。』

橘　媛

（は調六拍子）



橘　媛

大和田氏

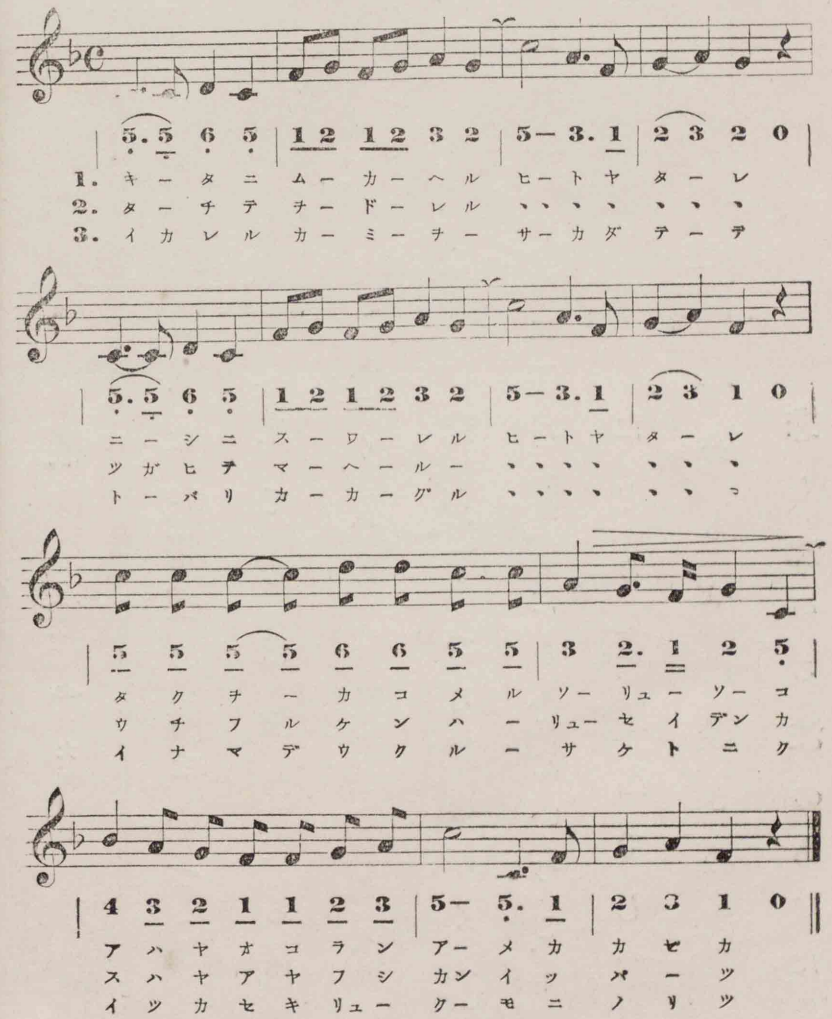
一、あはれ、相模の海はいづこ、
立てる白波、わたる嵐、
遠く望めば、果も知らず、
悲し、逝きつる媛のゆくへ。

二、媛を載せたる舟はいづこ、
たどる東路、出でし都、
心おもへば、盡きぬ涙、
悲し、沈める波のあなた。

鴻門の會

（子拍四調ヘ）

勇壯ニ　　田村氏



鴻門の會

大橋氏

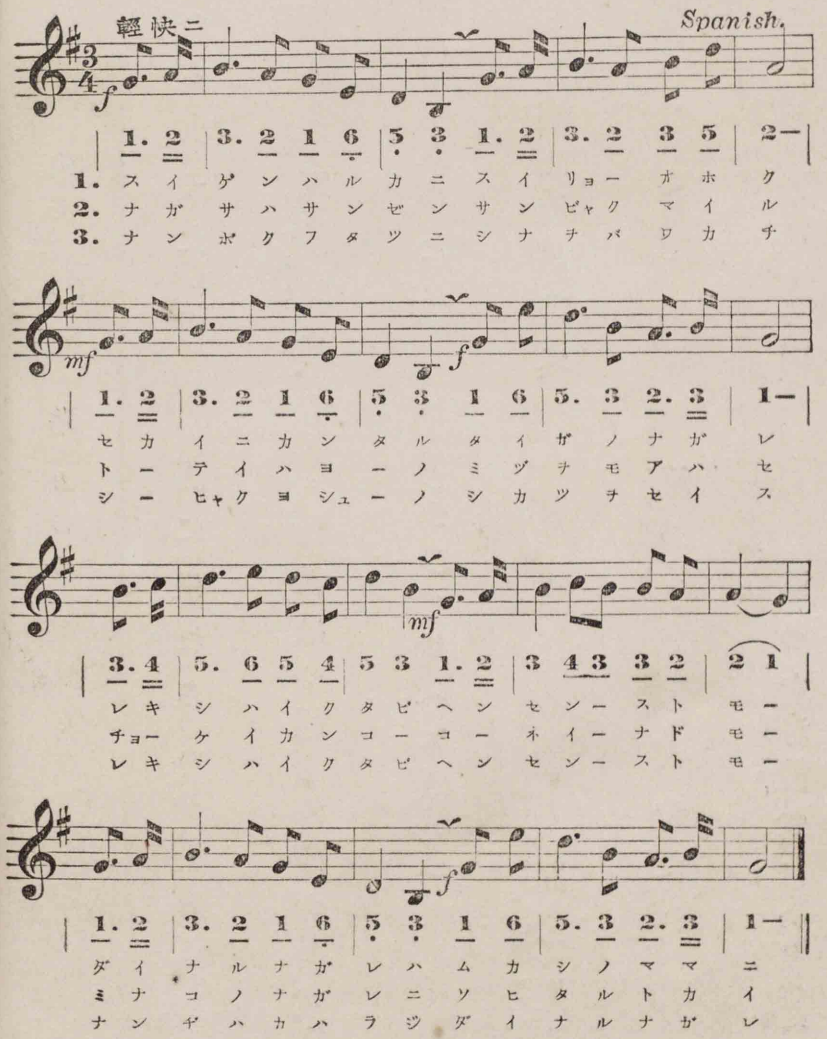
一、北に向へる人やたれ、
　卓を圍める双龍双虎、
　西に坐れる人やたれ。

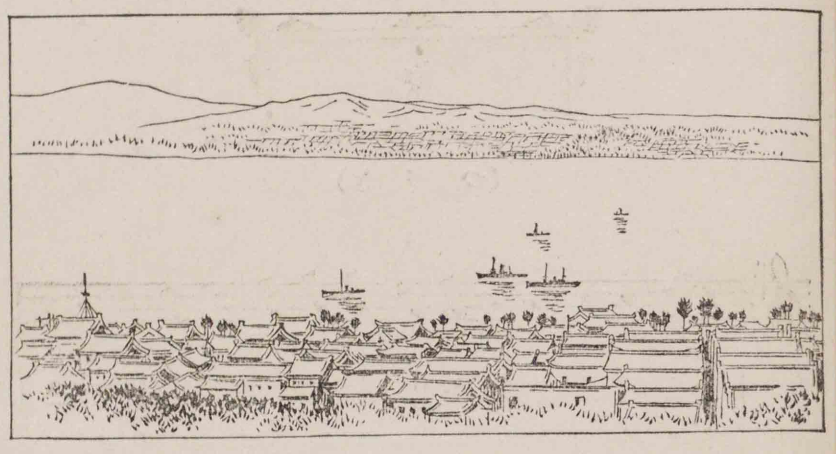
二、立ちて踊れる人やたれ、
　あはや起らん、雨か風か。」
　うちふる劍は流星電火、
　つがひて舞へる人やたれ。

三、怒れる髮をさかだてゝ、
　すはや危し、間一髮。」
　いなまで受くる酒と肉、
　雌かゝぐる人やたれ。
　いつか赤龍、雲にのりつ。」

揚子江

（子拍三調ト）





揚子江

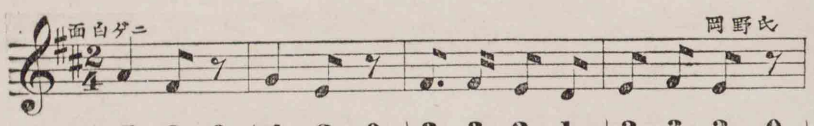
佐々木氏

一、水源はるかに水量多く、
　世界に冠たる大河の流。
歴史は幾たび變遷すとも、
　大なる流は昔のまゝに。
二、長さは三千三百哩、
　洞庭・鄱陽の水をも合せ、
重慶・漢口・江寧なども、
　皆この流に沿ひたる都會。
三、南北二つに支那をば分ち、
　四百餘州の死活を制す。
歴史は幾たび變遷すとも、
　汝は變らじ大なる流。

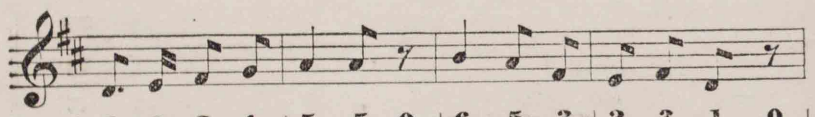
象

(に調二拍子)

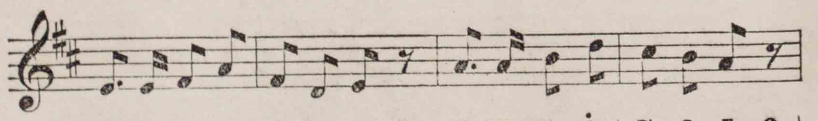
西白ダニ　　岡野氏



5 3 0	4 2 0	3. 3 2 1	2 3 2 0
1. ア レ	ア レ	ミ ヅ ノ ホ	ト リ ニ
2. 、 、	、 、	ハ ナ シ ノ	ナ カ チ



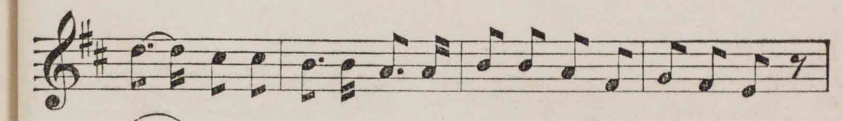
1. 2 3 4	5 5 0	6 5 3	2 3 1 0
ア マ タ ノ	ゾ ー ノ	ム レ ア	ソ ブ ヨ
、 、 、 、	、 、 、	、 、 ト	ホ ル ヨ



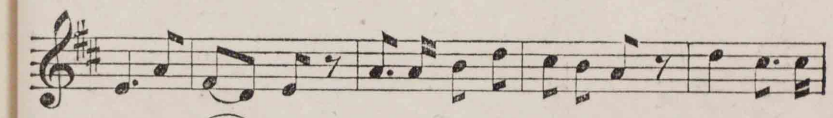
2. 2 3 5	3 1 2 0	5. 5 6 i	7 6 5 0
ミ ヨ ソ ノ	ナ ガ キ	ハ ナ チ バ	ノ ベ テ
ミ ヨ ソ ノ	マ ロ ク	フ ト レ ル	カ ラ ダ

象

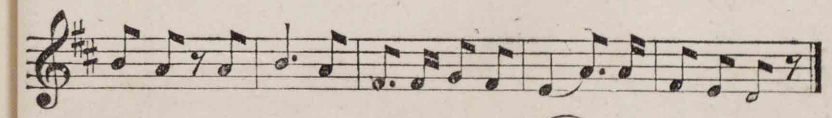
(つ づ き)



i. i 7 7	6. 6 5. 5	6 6 5 3	4 3 2 0
ミ ー ヅ チ	ス ヒ テ ハ	ク チ ニ ハ	コ ブ ヨ
チ チ フ ム	ガ ト ダ モ	タ テ ズ ア	ユ ム ヨ



2. 5	3 1 2 0	5. 5 6 i	7 6 5 0	i 7. 7
セ ナ ニ ー	ハ ユ フ ヒ	チ ア ビ テ	ヤ マ ノ	
ア サ カ ー	ゼ ヤ シ ノ	ハ フ イ テ	コ ガ ク	

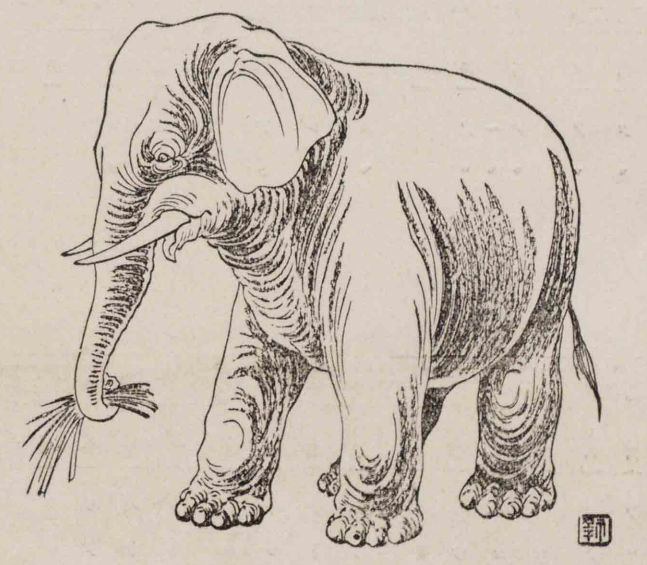


6 5 0 5	6. 5	3. 3 4 3	2 5. 5	3 2 1 0
ゴ ト ク	ロ ク	ツ ラ ナ ル	ゾ ー ノ	ム レ ヨ
レ チ イ	ヅ コ	ヘ タ ド ル	、 、 、	、 、 、

象

桑田氏

一、あれ〳〵、水のほとりに、
　あまたの象の
　　群れ遊ぶよ。
見よ、その長き鼻をばのべて、
　水を吸ひては、
　　口に運ぶよ。
背には、夕日をあびて、
　山のごと、黑く連なる、
　象の群よ。」

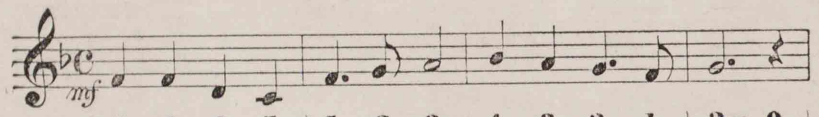


二、あれ〳〵林のなかを、
　あまたの象の
　　群れ通るよ。」
見よ、その圓く太れる體軀、
　地を踏む音だも
　　立てず歩むよ。」
朝風、椰子の葉、吹いて、
　木がくれを、いづこへたどる、
　象の群よ。』

遣唐使

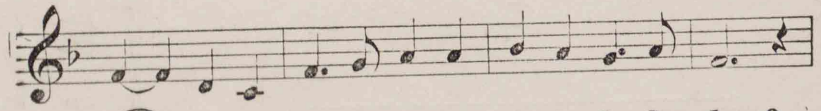
（ヘ調四拍子）

輕快ニ　　田村氏



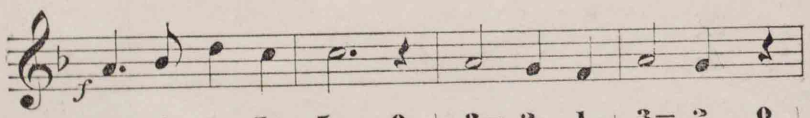
1 1 6 5 | 1. 2 3— | 4 3 2. 1 | 2—. 0 |

1. ナニハノ　ツヨリー　フナデシテ
2. カガミノ　ゴトキー　ウナバラモ
3. ナニハノ　ツニハー　カヘリキヌ



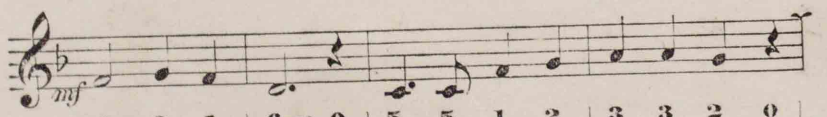
1 1 6 5 | 1. 2 3 3 | 4 3 2. 3 | 1—. 0 |

カーゼニ　マカスル　ヨツノフネ
アレテハ　スゴキー　ナミノオト
カーゼニ　マカセテ　ヨツノフネ



3. 4 6 5 | 5—. 0 | 3— 2 1 | 3— 2 0 |

ケントーシ　イーマゾ　ターツ
ヨツノフネ　ターダヨ　ヒーヌ
ケントーシ　イーマゾ　ツーク

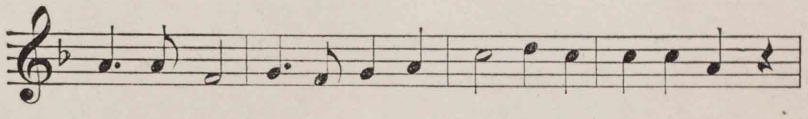


1— 2 1 | 6—· 0 | 5. 5 1 2 | 3 3 2 0 |

オホギミノ　オホセチウケテ
、、、、、　、、、、イカニ
、、、、、　、、、ハタシテ

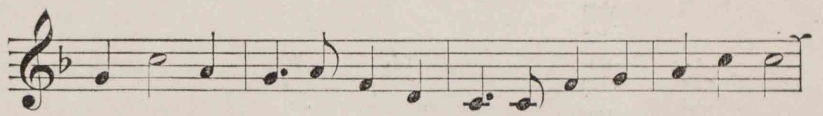
遣唐使

（つづき）



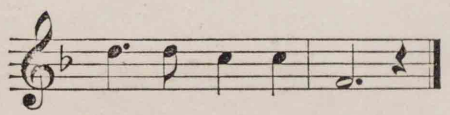
3. 3 1— | 2. 1 2 3 | 5—6 5 | 5 5 3 0 |

コクショーササゲテ　クーモカヤマカ
シメイーハタサン　カーゼカナミカ
プンカーツタヘチ　ウーレシウレシ



2 5—3 | 2· 3 1 6 | 5· 5 1 2 | 3 5 5— |

ナミーザハルケキ　モロコシ、サシテー
アルールフナザチ　、、、、、、、、
ヨピカフコーエニ　ミクニノサカエー



6. 6 5 5 | 1—·0 ||

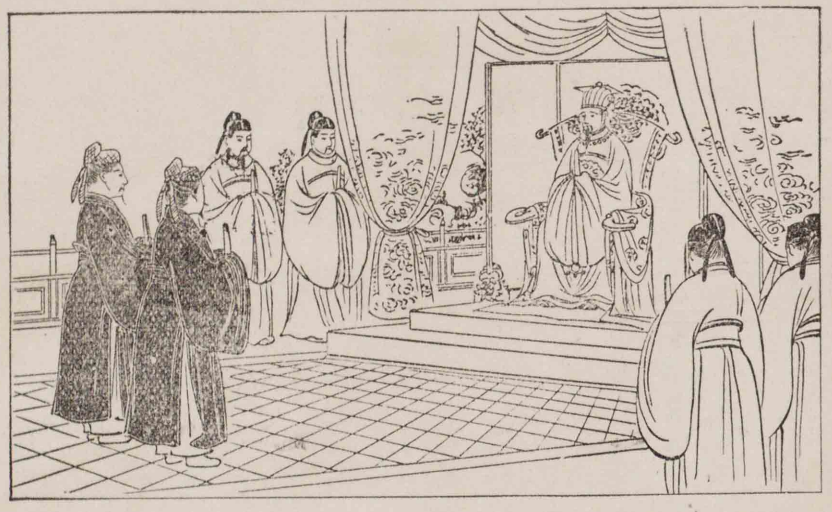
イサマシク
、、、、、
トコトハニ

遣唐使 ㊀

蘆田氏

一、浪速の津より船出して、
　風にまかする四つの船。
遣唐使、今ぞ立つ、
　大君の　仰を受けて、
　　國書、捧げて、
雲か山か、　波路はるけき、
唐土(もろこし)さして勇ましく。」

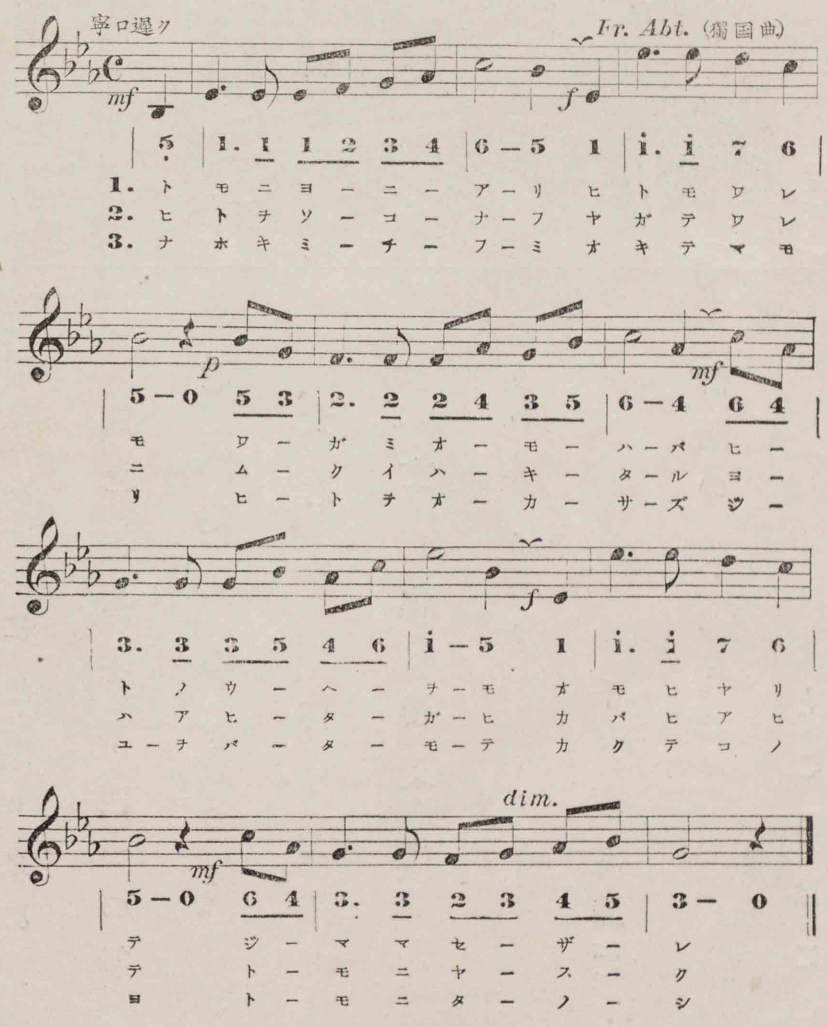
二、鏡のごとき海原も、
　あれては凄き濤の音
四つの船、漂ひぬ、
　大君の　仰をいかに、
　　使命はたさん。
風か波か、　あるゝ船路を、
唐土(もろこし)さして勇ましく。」



三、浪速(なには)の津には歸り來ぬ、
　風にまかせて四つの船。
遣唐使、今ぞつく、
　大君の　仰はたして、
　　文化傳へて、
うれし、うれし、
　　呼びかふ聲に、
御國のさかえ、
　　とことはに。』

世は相持

（子拍四調ほ變）



世は相持

桑田氏

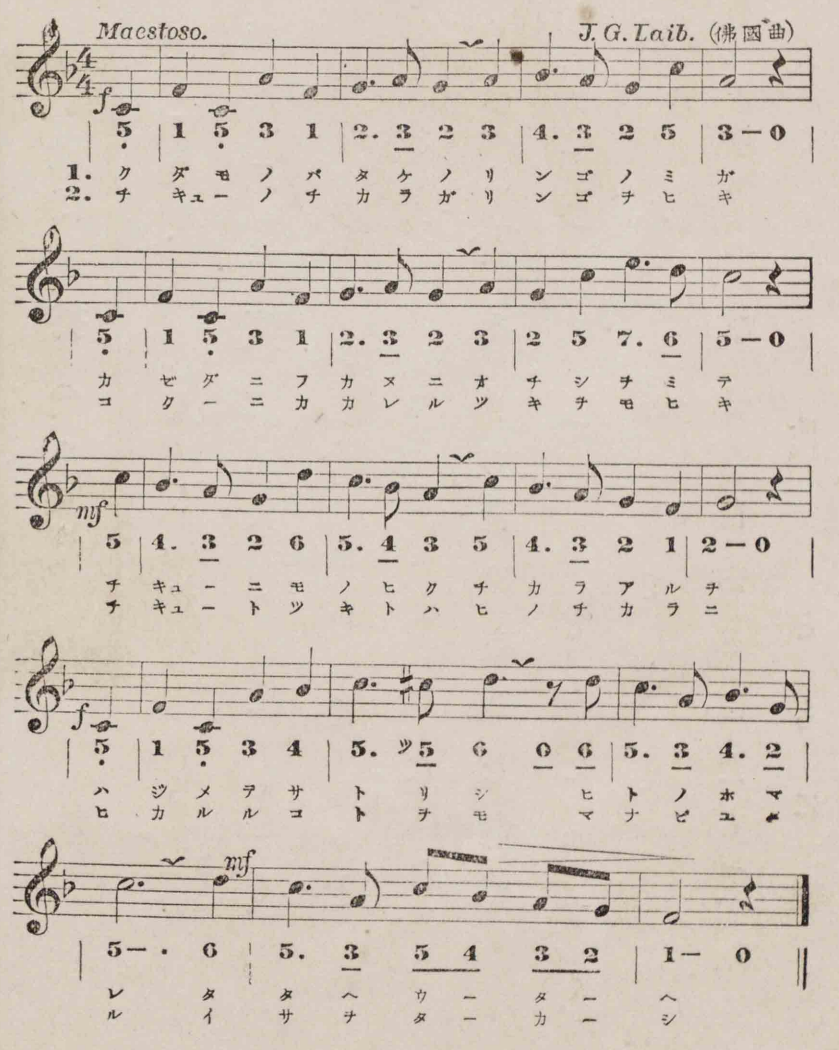
一、ともに世にあり、　人もわれも、
　わが身思はば、　人の上をも、
　おもひやりて、　自儘せざれ。」

二、人をそこなふ、　やがてわれに、
　むくいは來る、　世はあひたがひ、
　かばひあひて、　ともにやすく。」

三、直き道ふみ、　おきて守り、
　人を犯さず、　自由をばたもて、
　かくてこの世、　ともに樂し。』

ニュートン

（ヘ調四拍子）



ニュートン　大和田氏

一、くだもの畠の林檎の實が、風だに吹かぬに落ちしを見て、
地球に物引く力あるを、始めて悟りし人の譽れ、
たゝへうたへ。

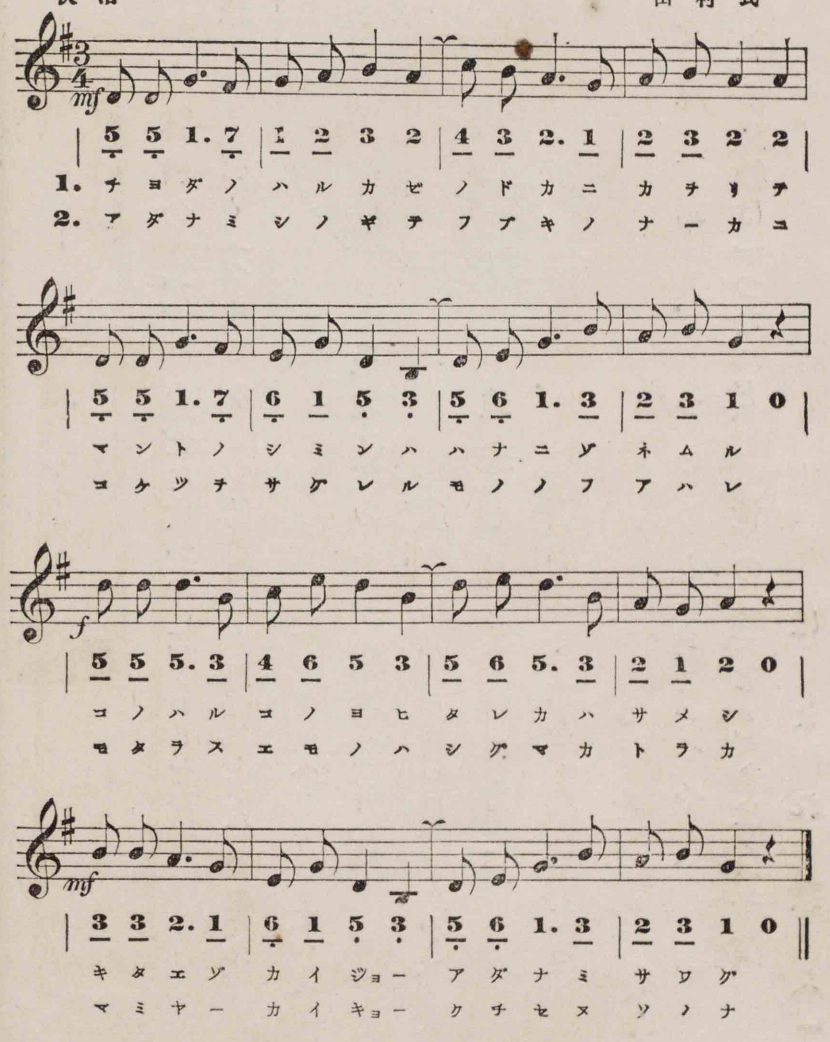
二、地球の力が林檎を引き、
虚空にかゝれる月をも引き、
地球と月とは日の力に、
引かるゝ事をも學び得たる、
いさを高し。

三、學の力を思へや人、つとめし功を思へや人、
落ちたる林檎は一つなれど、世の益なしゝは百千萬、
ほまれ歌へ。

間宮海峡

（ト調三拍子）

快活ニ　　田村氏



間宮海峡

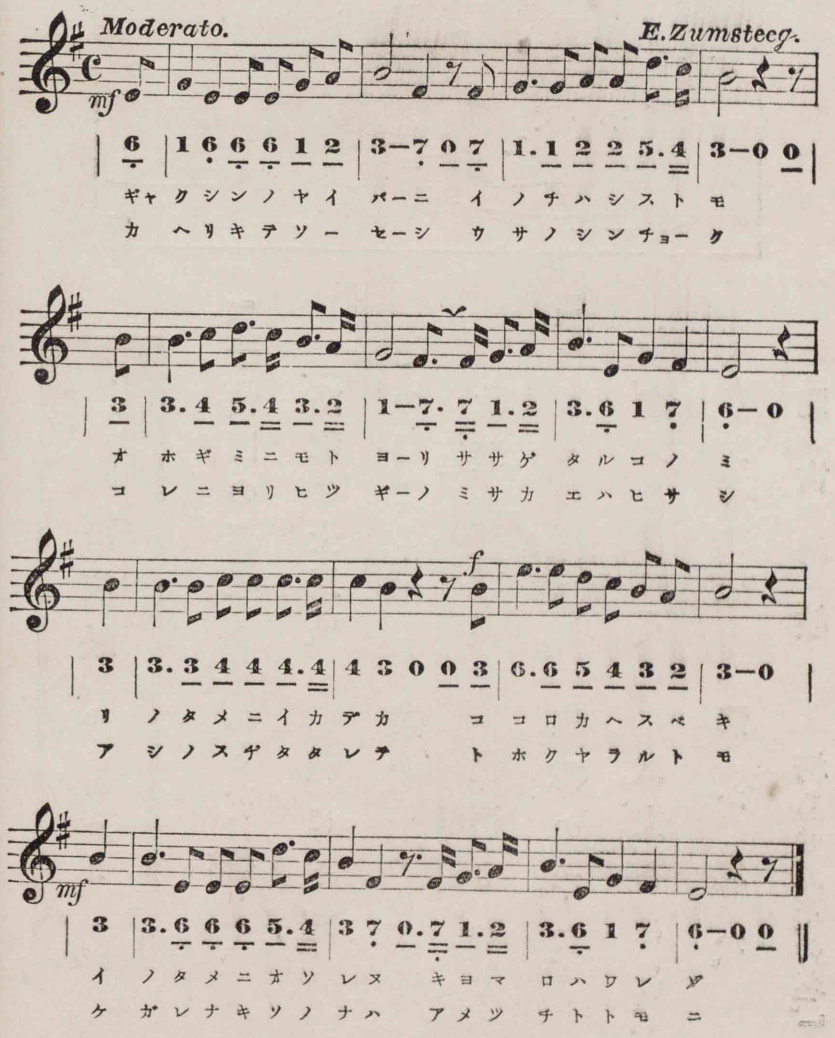
大橋氏

一、千代田の春風、　のどかに馨りて、
　　花にぞ眠る。
　　滿都の士民は、
　　この春、この宵、　誰かはさめし、
　　北蝦夷海上、　仇浪さわぐ。」

二、仇浪しのぎて、　吹雪の中に、
　　虎穴を探れる、　武夫あはれ。
　　もたらす獲物は、　羆か虎か、
　　間宮海峡　朽ちせぬその名。』

和氣清麻呂

（ほ短調四拍子）



和氣清麻呂

大和田氏

一、逆臣のやいばに、命は死すとも、大君にもとより捧げたる此身。

利のために、威のために、いかでか、心回すべき、

二、歸り來て奏せし宇佐の神勅。これにより日嗣の御榮は久し。

清麻呂は我ぞ。」

足の筋、斷たれて、遠く遣らるとも、

穢れなき其名は天地と共に。』

開墾

（ハ調四拍子）

愉快ニ

西洋曲.

5	3·	2	3	4	5	—5	5	6·	7	i	6	5—0
1. ス	ス	キ	ノ	シ	ゲ	ール	ノ	ベ	チ	ヒ	ラ	キ
2. ジ	ン	カ	モ	ミ	エ	ーヌ	ク	サ	ノ	ハ	ラ	ニ
3. ヒ	ラ	ケ	バ	ト	チ	ーハ	ム	ラ	チ	エ	キ	シ

5	3·	3	2	i	2	—7	5	6·	7	i	6	5—0
タ	ハ	ウ	チ	イ	レ	ーテ	ハ	タ	ト	ナ	セ	バ
ミ	ヅ	ヒ	キ	イ	レ	ーテ	チ	ダ	ト	ナ	セ	バ
ウ	ウ	レ	バ	ナ	ヘ	ーハ	ク	ニ	チ	エ	キ	ス

5	2·	2	7	5	i	—5	3	4·	5	6	4	5—0
オ	ホ	ム	ギ	ヒ	イ	ーデ	コ	ム	ギ	ノ	ピ	テ
タ	ウ	エ	ノ	ウ	タ	ーモ	ソ	ラ	ニ	ヒ	ピ	キ
ツ	ト	メ	ズ	ナ	サ	ーズ	ク	ラ	ス	ヒ	ト	ニ

5	i·	7	i	2	3	—i	6	5·	4	3	2	1—0
カ	ギ	リ	ハ	シ	ラ	ーズ	サ	カ	ユ	ク	ス	エ
ユ	タ	カ	ニ	エ	タ	ール	ア	キ	ノ	ミ	ノ	リ
ナ	ラ	ハ	デ	ハ	ゲ	ーメ	ノ	ー	ノ	ミ	チ	チ

開墾

大和田氏

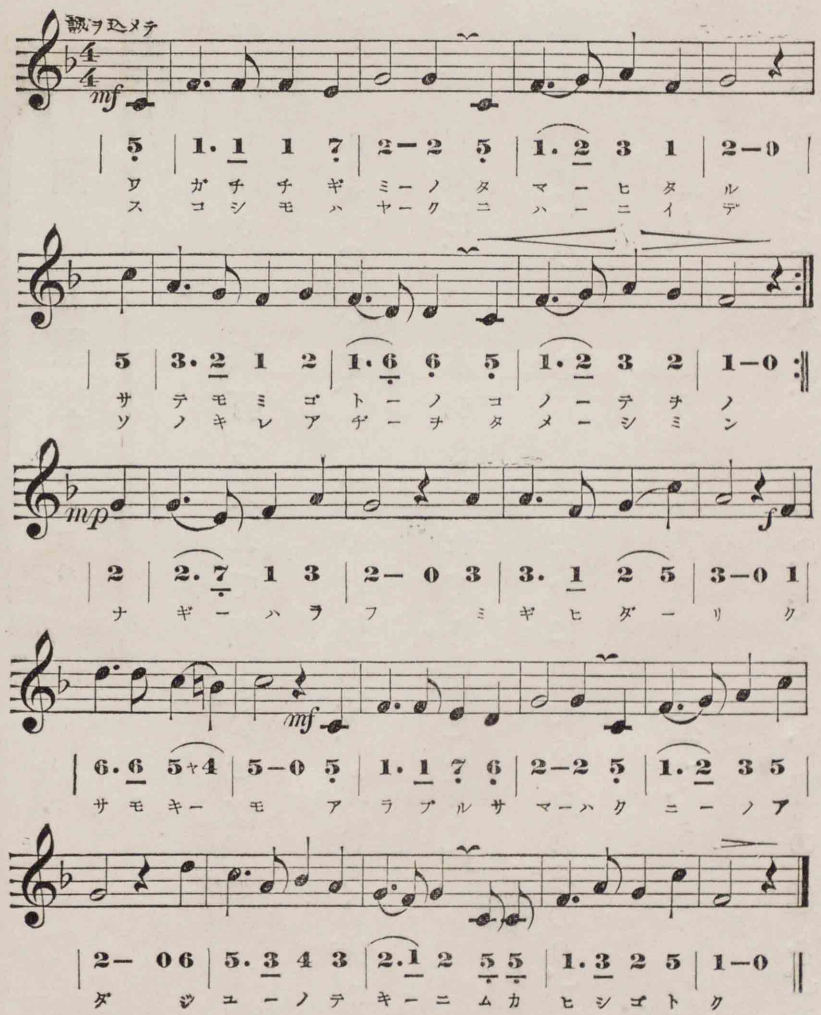
一、薄のしげる野邊を開き、　鍬打ち入れて、畑となせば、
大麥ひいで、小麥のびて、　限りは知らず、榮ゆく末。」

二、人家も見えぬ草の原に、　水引き入れて、小田となせば、
田植の歌も、空にひびき、　ゆたかに得たる、秋のみのり。」

三、開けば土地は、村を益し、　植うれば苗は、國を益す、
つとめず、爲さず暮らす人に、　習はで勵め、農の道を。』

ワシントン

（ヘ調四拍子）



ワシントン

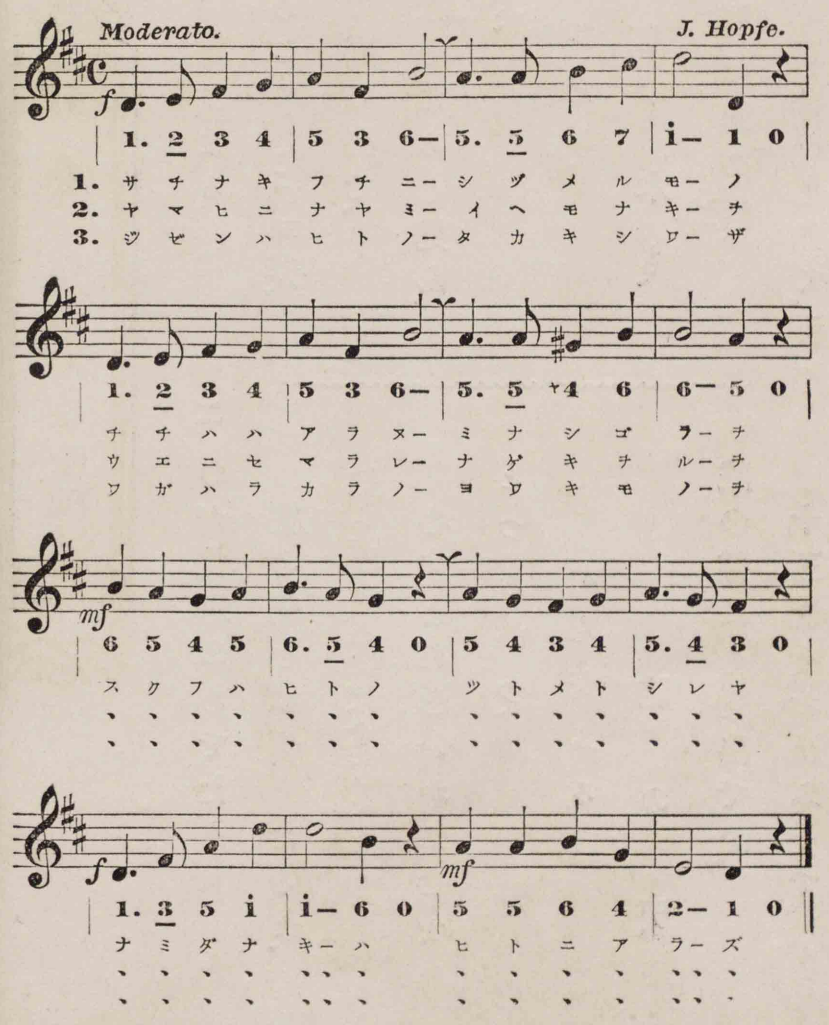
大橋氏

一、わが父君の賜ひたる、
　さてもみごとのこの手斧、
少しも早く庭に出で、
　その切味をためし見ん、
なぎはらふ、
　みぎひだり、
　　草も木も、
あらぶる様は國の讎、
自由の敵に向ひし如く。」

二、わが父君のめでたまふ、
　櫻の樹をば切りたるよ、
知らずと言はばすむべきも、
　心すまぬをいかにせん、
とつおいつ、
　かんがふる
　　胸の中、
誠の種はもえ出でぬ、
　十三洲をおほふまで。』

慈善

（子拍四調に）



慈善

佐々木氏

第一章

幸なき淵にしづめるもの、父母あらぬ孤兒らを、
救ふは人の務と知れや、涙なきは人にあらず。」

第二章

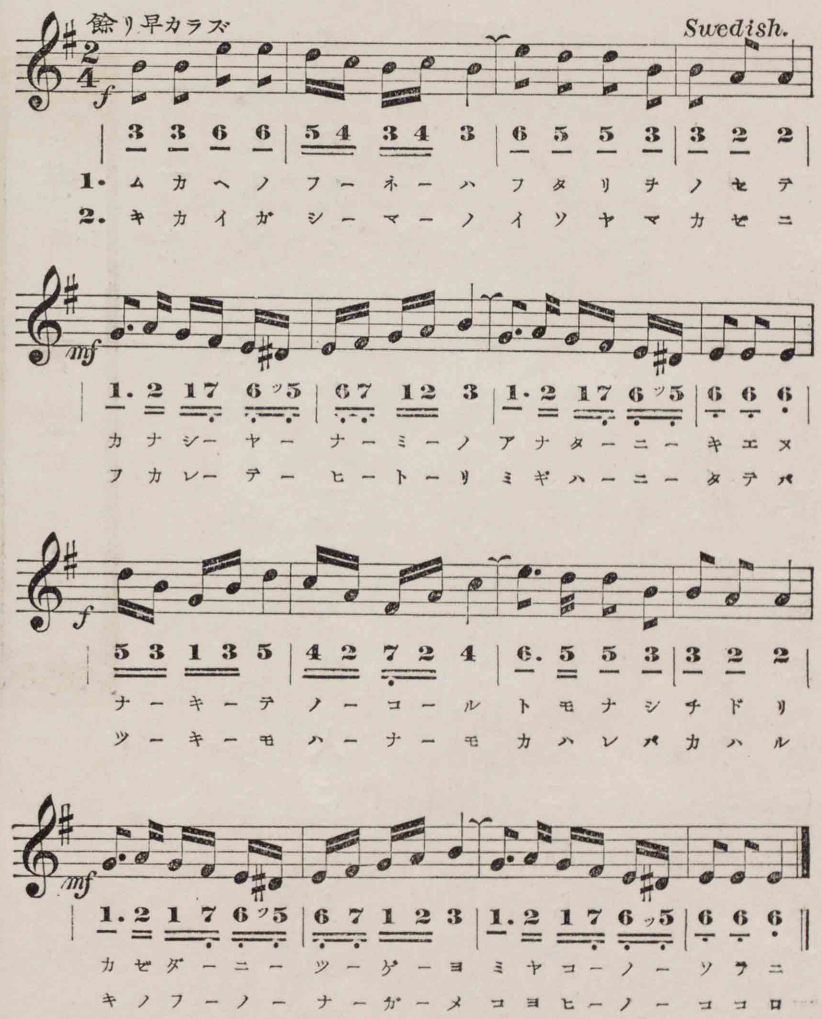
病になやみ家もなきを、飢にせまられ歎き居るを、
救ふは人の務と知れや、涙なきは人にあらず。」

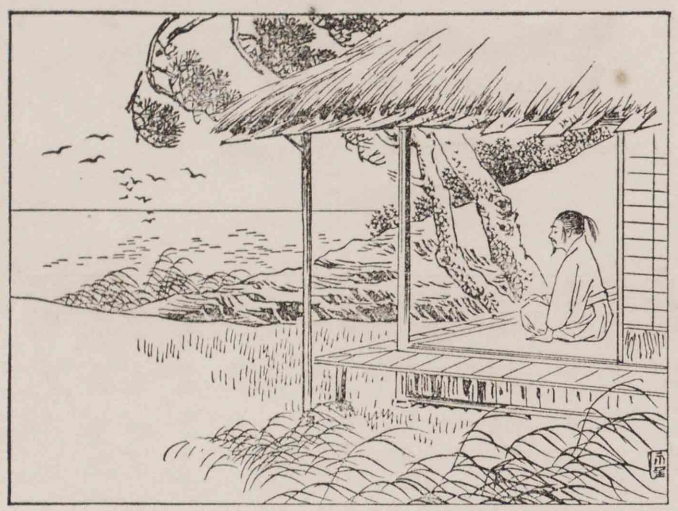
第三章

慈善は人の高きしわざ、わが同胞の弱き者を、
救ふは人の務と知れや、涙なきは人にあらず。』

俊寛僧都

（ほ短調二拍子）





俊寛僧都

大和田氏

一、迎への船は　二人を乘せて、
悲しや、波の　あなたに消えぬ。

鳴きて殘る　友なし千鳥、
風だに告げよ、　都の空に。」

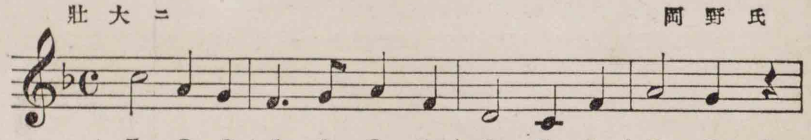
二、鬼界が島の　磯山風に、
吹かれて一人　渚に立てば、

月も花も　變れば變る、
昨日のながめ、　今宵の心。』

サハラの大沙漠

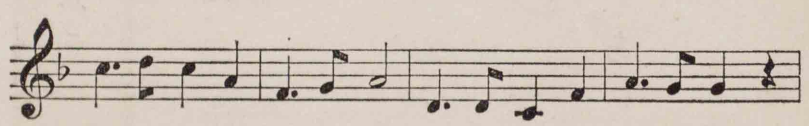
（へ調四拍子）

壯大ニ　　岡野氏



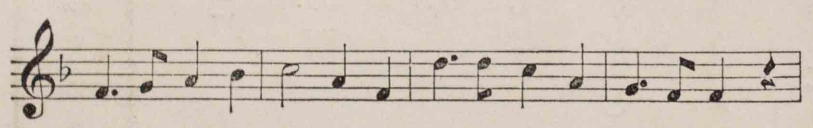
5— 3 2 | 1. 2 3 1 | 6— 5 1 | 3— 2 0

1. フールキレキシニナーノダカーキ
2. イーマモカハラヌダーイショ—ノ



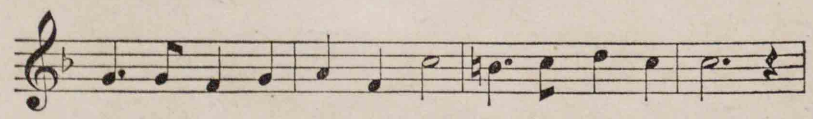
5. 6 5 3 | 1. 2 3— | 6. 6 5 1 | 3. 2 2 0

エジプトノニシーセンイクヒャクリ
ミナミニキタニーヨチヒニツギテ



1. 2 3 4 | 5— 3 1 | 6. 6 5 3 | 2. 1 1 0

サハラノサーバクサテモヒロシヤ
タビスルローザノサテモチチシヤ

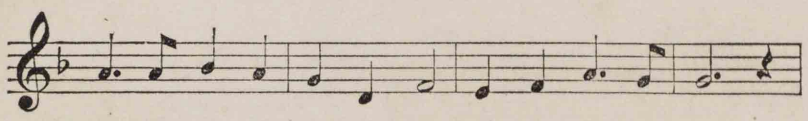


2. 2 1 2 | 3 1 5— | 4. 5 6 5 | 5—.0

メチサヘギルハーネッブーノ
ツキサユルヨハースズシクテ

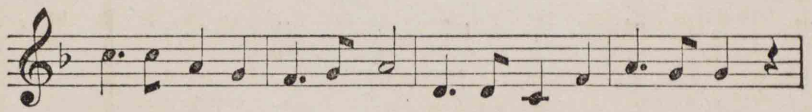
サハラの大沙漠

（つづき）



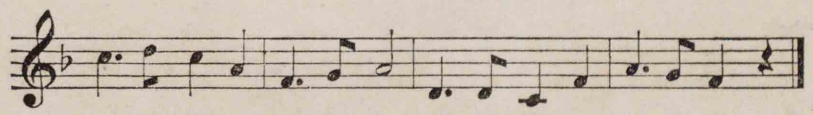
3. 3 4 3 | 2 6 1— | 7 1 3. 2 | 2—.0

アレテツクリシースナノヤマ
ヤドルセンチノーヤシノカゲ



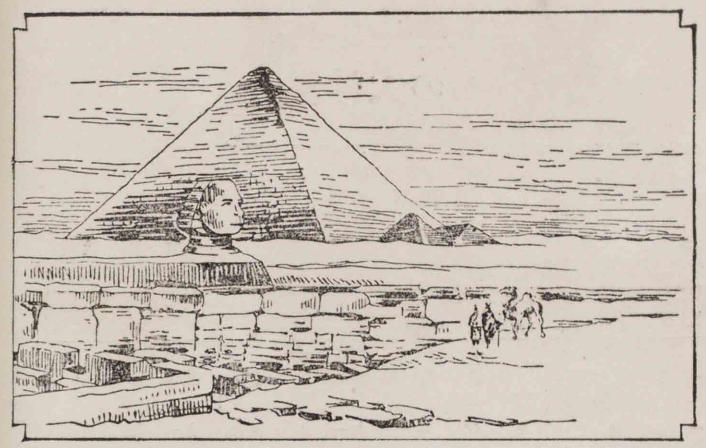
5. 5 3 2 | 1. 2 3— | 6. 6 5 1 | 3. 2 2 0

マヒルノアツサーイシサヘヤケテ
テントノソトニーラクダハフシテ



5. 6 5 3 | 1. 2 3— | 6. 6 5 1 | 3. 2 1 0

モエタツイロニーユフヒハシヅム
アカツキノカゼーシヅカニワタル



サハラの大沙漠

蘆田氏

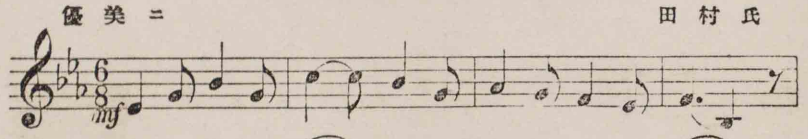
一、古き歴史に　名の高き。」
エジプトの西　千幾百里、
サハラの沙漠、さても廣しや。
目をさへぎるは　熱風の、
あれてつくりし　沙の山、
まひるの暑さ　石さへ燒けて、
燃えたつ色に　夕日は沈む。」

二、今もかはらぬ　隊商の、
南に北に　夜を日につぎて、
旅するわざのさても雄々しや。
月さゆる夜は　涼しくて、
宿る泉地の椰子の影、
テントの外に　駱駝は伏して、
曉の風、靜にわたる。」

コロンブス

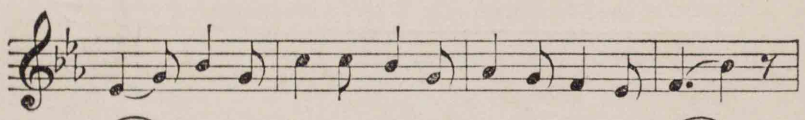
（變ほ調六拍子）

優美ニ　　田村氏



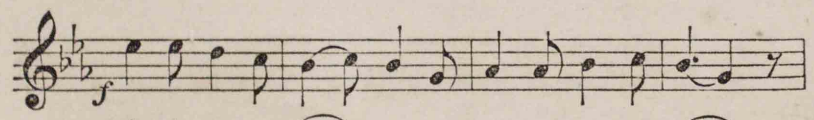
1 3 5 3 | 6 6 5 3 | 4 3 2 1 | 2. 5 0 |

1. チ キュー ハ マ ー ロ シ ヒ ガ シ ヨ リ ー
2. ジ ダ イ ハ イ マ ヨ リ シ ヒャ ク ネ ン ー
3. イ サ ミ ニ イ サ ム ー コ ロ ン ブ ス ー
4. サ レ ド モ ク ッ セ ズ タ ジ ロ カ ズ ー



1 3 5 3 | 6 6 5 3 | 4 3 2 1 | 2. 5 0 |

ニ ー シ ヘ ニ シ ヘ ト コ ギ ユ カ バ ー
ム カ シ ノ コ ト ニ テ ア リ ケ ル ガ ー
メ ロ ス ノ ミ ナ ト ヲ ア ト ニ シ テ ー
シ チ ジュー ヨ ニ チ ノ ソ ノ ノ チ ニ ー

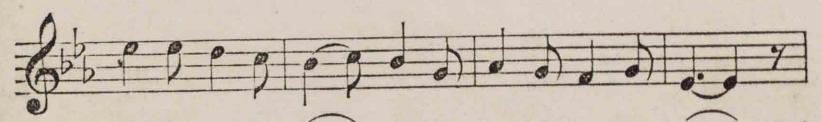


i i 7 6 | 5 6 5 3 | 4 4 5 6 | 5. 3 0 |

ヒ ガ シ ノ ハ ー テ ト シ ン ジ タ ル ー
ソ ノ ト ク ト コ ロ ヲ タ レ モ ミ ナ ー
ノ リ ダ ス バ ン リ ノ ナ ミ ノ ウ ヘ ー
リ ク チ ハ マ ー ヘ ニ ア ラ ハ レ ヌ ー

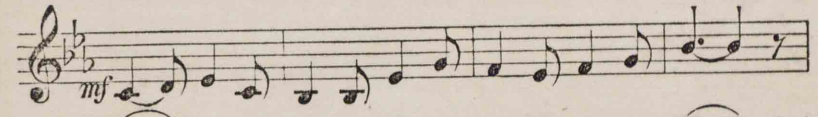
コロンブス

（つづき）



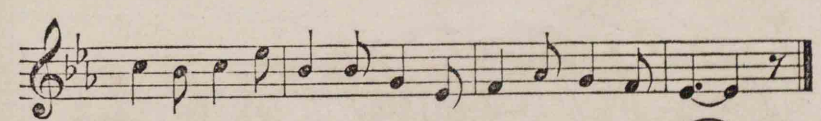
i i 7 6 | 5 6 5 3 | 4 3 2 3 | 1. 1 0 |

イ ン ド ノ ハ ー シ ニ タ ッ セ ン ト ー
シ ー ン ゼ ザ リ シ ニ タ ダ ヒ ト リ ー
ク モ ヨ リ ホ ー カ ハ ハ テ モ ナ シ ー
ソ ノ ヨ ロ コ ー ビ ヤ イ カ ナ リ シ ー



6 7 1 6 | 5 5 1 3 | 2 1 2 3 | 5. 5 0 |

オ ー モ ヒ サ ダ メ テ コ ロ ン ブ ス ー
イ ス パ ニ ヤ コ ク ノ コ ー ゴ ー ハ ー
メ ー ザ ス リ ク チ ハ イ ヅ カ タ ゾ ー
コ ー レ ゾ ナ ン ボ ク ア メ リ カ ノ ー



6 5 6 i | 5 5 3 1 | 2 4 3 2 | 1. 1 0 ||

コ ー ロ チ ツ ケ ン ト ク ハ ダ テ ヌ ー
ヨ ミ シ テ ヒ ヨ ー チ ア タ ヘ ケ リ ー
ス イ フ ノ イ カ リ チ イ カ ニ セ ン ー
セ カ イ ニ シ ラ レ シ ハ ジ メ ナ ル ー

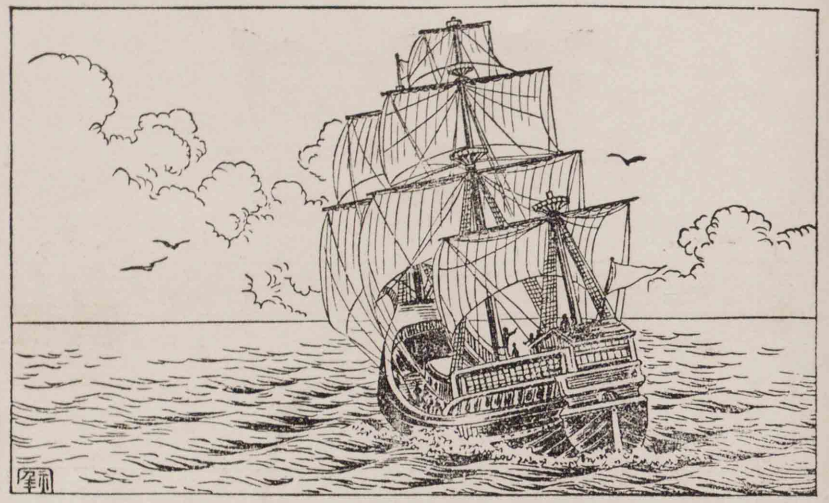
コロンブス　三

大和田氏

一、地球は圓し、東より、
西へ、西へと漕ぎ行かば、
東の果と信じたる、
印度の端に達せんと、
思ひ定めて、コロンブス、
航路をつけんと企てぬ。

二、時代は今より四百年、
昔の事にてありけるが、
その說く處を誰も皆、
信ぜざりしに、只一人、
イスパニヤ國の皇后は、
嘉して、費用を與へけり。

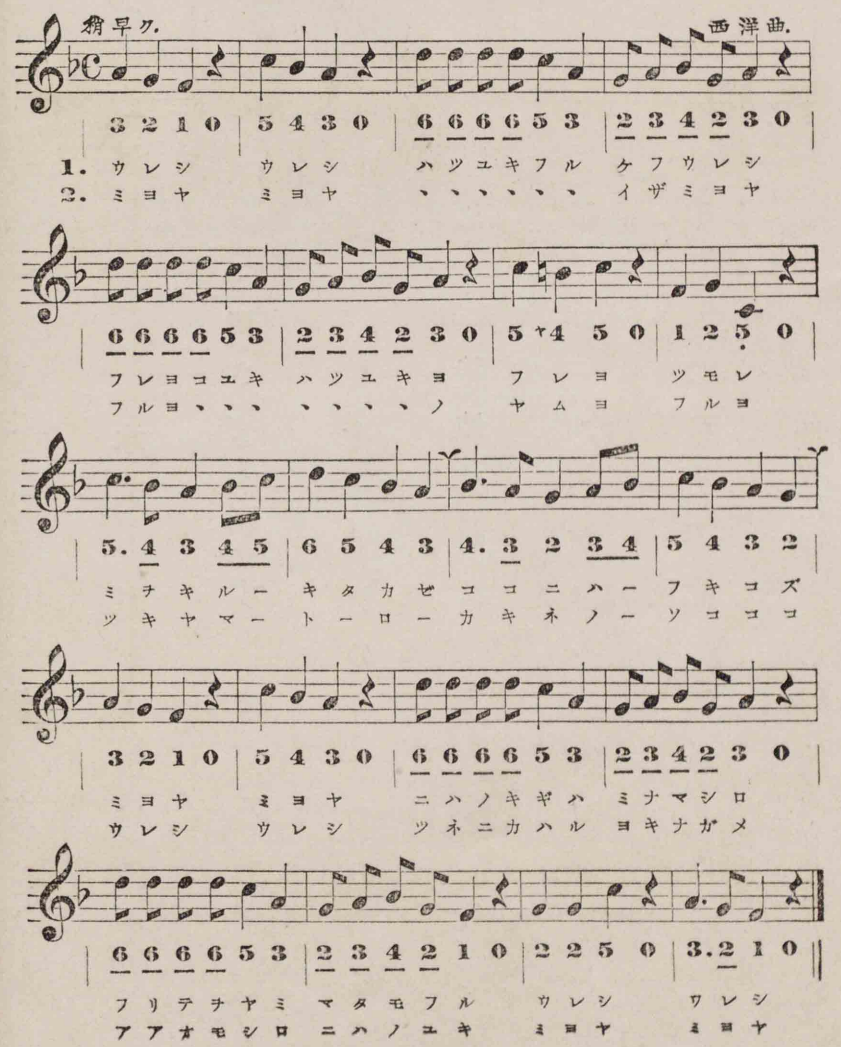
三、勇みに勇むコロンブス、
パロスの港を後にして、
乘り出す萬里の波の上、
雲より外は果もなし。



四、目ざす陸地は何方ぞ、
水夫の怒を如何にせん。
されども屈せず、たじろかず、
七十餘日のそののちに、
陸地は前にあらはれぬ、
その喜びや如何なりし、
これぞ南北アメリカの、
世界に知られし始めなる。

初雪

（ヘ調四拍子）



初雪

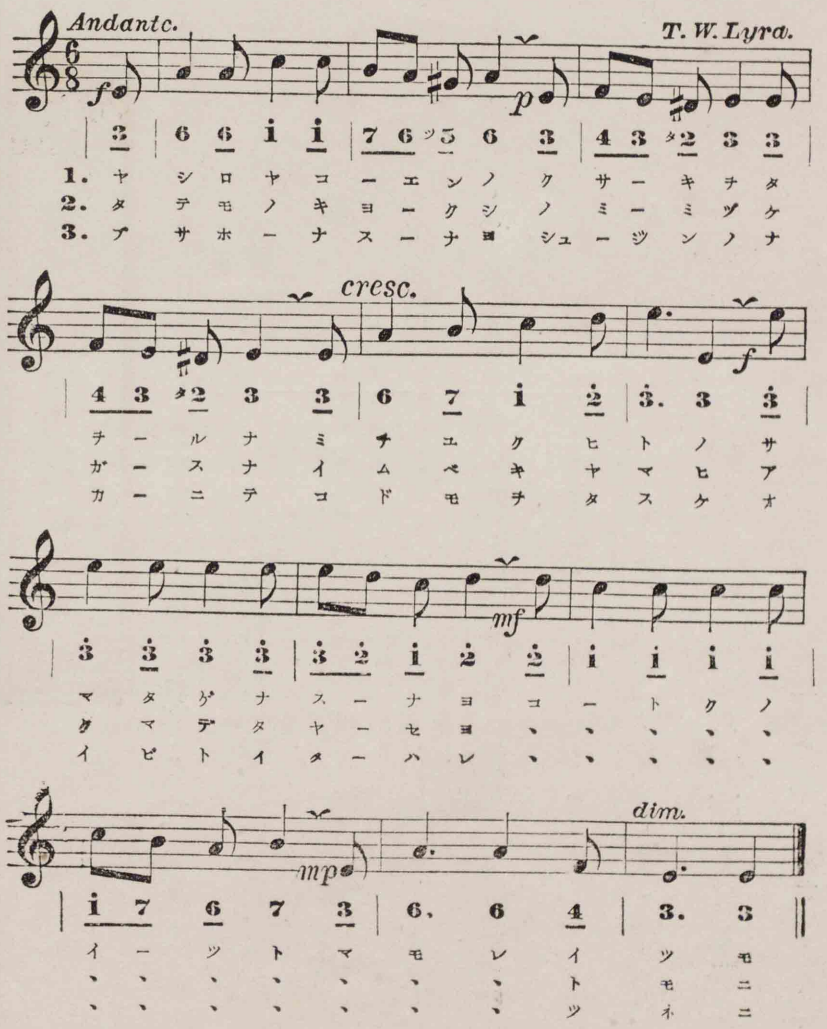
桑田氏

一、うれし、うれし、
初雪ふる、けふ嬉し。
ふれよ小雪、初雪よ、
ふれよ、つもれ。
身をきる北風、こゝには吹き來ず、
見よや、見よや、
庭の木々は、みな眞白。
ふりて、をやみ、又もふる、
うれし、うれし。」

二、見よや、見よや、
初雪ふる。いざ見よや。
ふるよ小雪、初雪の、
やむよ、降るよ。
築山。燈籠、籬根のそこ此處、
うれし、うれし、
常にかはる、よき眺め。
あゝおもしろ、庭の雪、
見よや、見よや。』

公　徳

（子拍六調短い）



公　徳

武島氏

一、やしろや公園の、草木をたをるな。
路ゆく人の、さまたげなすなよ。
公徳の一と、守れ何時も。

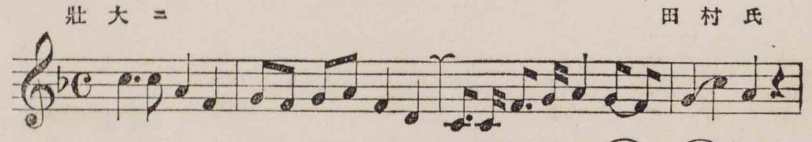
二、建物きよくし、飲水けがすな。
忌むべきやまひ、あくまでたやせよ。
公徳の一と、守れ共に。

三、無作法なすなよ、衆人のなかにて。
子供をたすけ、老人いたはれ。
公徳の一と、守れ常に。

ナイヤガラ瀑布

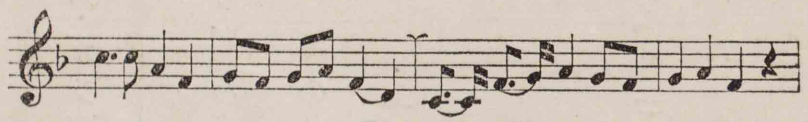
（ヘ調四拍子）

壯大ニ　　田村氏



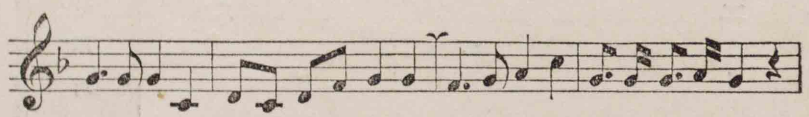
5.5 3 1 | 2 1 2 3 1 6 | 5.5 1.2 3 2 1 | 2 5 3 0

1. ソノナモセーカーイニトドロキワター　レール
2. アーマノカーハーセノツツミヤクヅー　レーシ



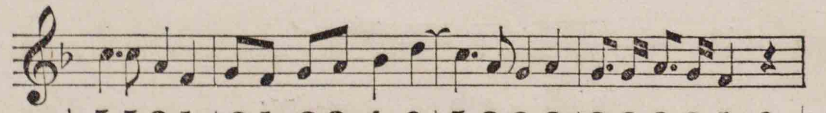
5.5 3 1 | 2 1 2 3 1 6 | 5.5 1.2 3 2 1 | 2 3 1 0

トーザイ　ムーヒーノー　ダーイーバクー　フトテ
ミソラノ　クーモーノー　ナーダーレカー　オツル



2.2 2 5 | 6 5 6 1 2 2 | 1.2 3 5 | 2.2 2.3 2 0

ソーハバ　アーハーセテ　ロッピャク　ロクジュッケン
モーモー　ダールー水煙　ハクウンマヒノボリ

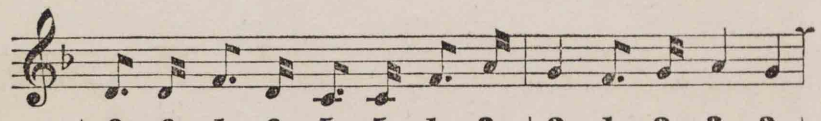


5.5 3 1 | 2 1 2 3 4 6 | 5.3 2 3 | 2.2 3.2 1 0

タカサハ　オーホーヨソ　ジューユー　ロクジョーヨ
ゴーゴー　ダールー振ク　バンライ　ナリトヨム

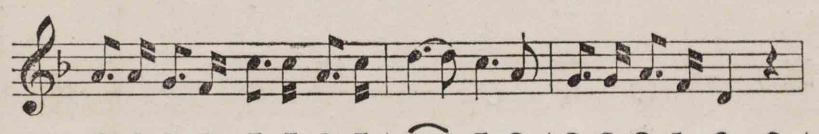
ナイヤガラ瀑布

（つづき）



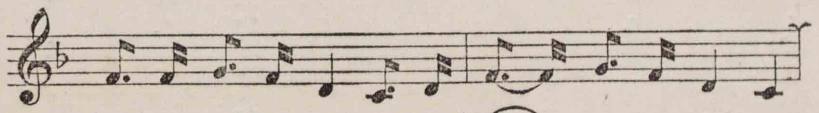
6. 6 1. 6 5. 5 1. 3 | 2 1. 2 3 2

ナニオフタイコノ　スベリオル
モシマタニッコー　エイズーレバ



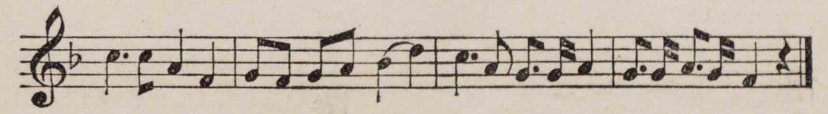
3.3 2.1 5.5 3.5 | 6.6 5.3 | 2.2 3.1 6 0

ミシガン　ヒューロン　ミーツノ　ミヅウミノ
ギーンノ　ビョーブニ　シチサイ　ノーニージ



1. 1 2. 1 6 5. 6 | 1. 1 2. 1 6 5

ミヅコトゴトク　エーリーコニ
ヒトヲザナラヌ　シセンノ　繪畫



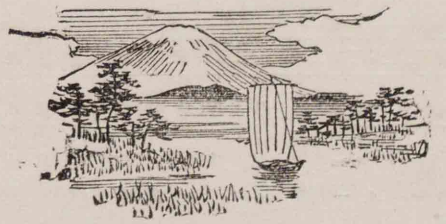
5.5 3 1 | 2 1 2 3 4 6 | 5.3 2.2 3 | 2.2 3.2 1 0

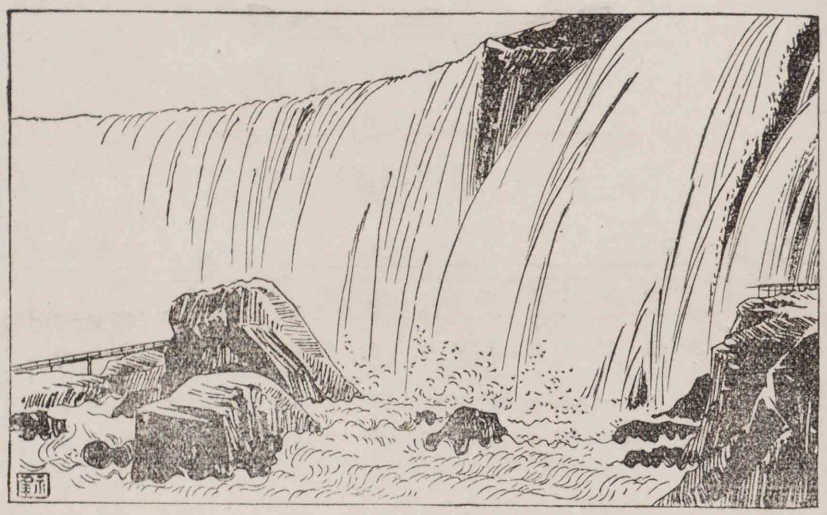
ソソギテ　オーツールー　イキホヒノ　スサマジサ
テンカノ　イーカーンヨ　ナイヤガラノ　ダイバクフ

ナイヤガラ瀑布

石原氏

一、その名も世界に　とどろき渡れる、
　　東西無比の　大瀑布として、
　　總幅あはせて　六百六十間、
　　高さは大凡　十有六丈餘。
名におふ大湖の　スペリオル、
　　ミシガン、ヒューロン、　三つの湖の、
　　水ことごとく　エリー湖に、
　　そゝぎて、落つる　勢の凄じさ。」

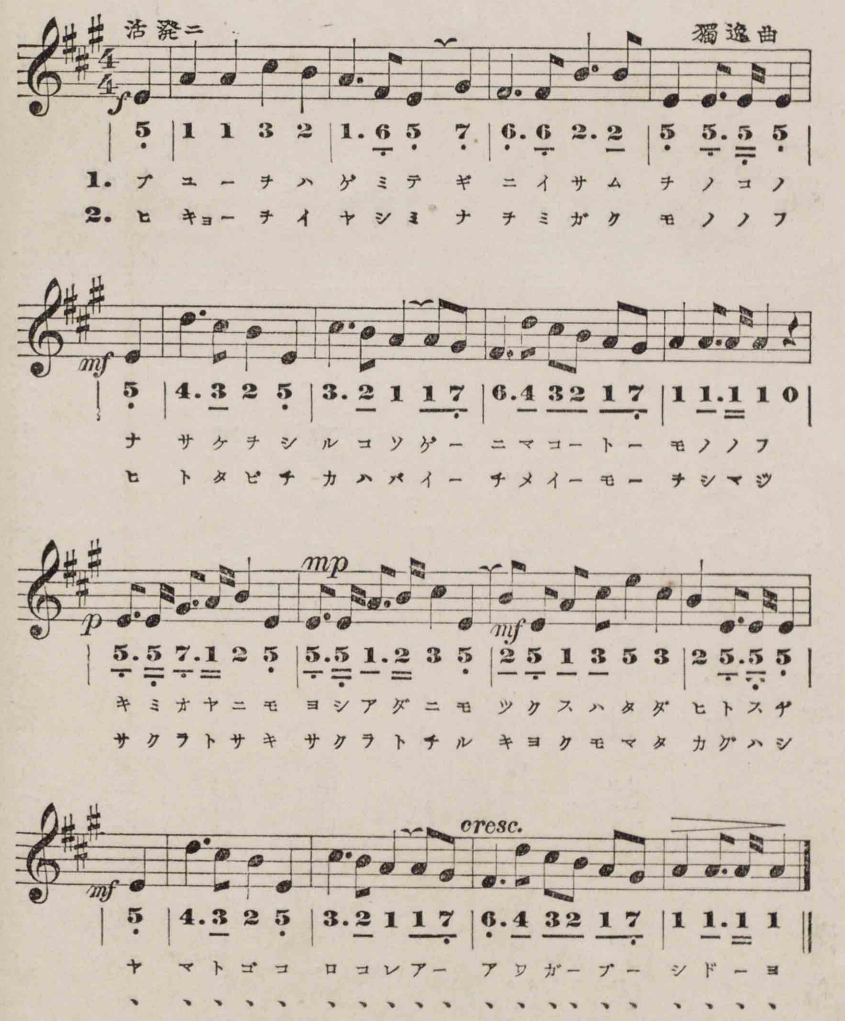




二、天の川瀬の　堤やくづれし。
　　み空の雲の　なだれか落つる。
　　濛々たる水煙、白雲まひ上り、
　　轟々たる振動、萬雷なりとよむ。
　　もし、又、日光映ずれば、
　　銀の屏風に七彩の虹、
　　人わざならぬ自然の繪畫。
　　天下の偉觀よ、
　　ナイヤガラの大瀑布。』

武士道

（子拍四調い）



武士道

桑田氏

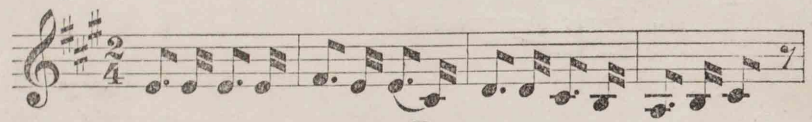
一、武勇を　勵みて、
　義に勇む　をのこの、
なさけを知るこそ、
　げに、まこと、武夫。
君・親にも、よし仇にも、
　つくすは、ただ、一すぢ。
大和心　これ、
　ああ、わが武士道よ。

二、卑怯を　いやしみ、
　名をみがく武夫、
ひとたび誓はば、
　一命も惜まじ。
櫻と咲き、櫻と散る、
　きよくも、また、かぐはし。
大和心　これ、
　ああ、わが武士道よ。

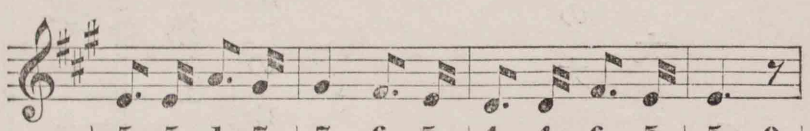
奉天會戰

(い調二拍子)

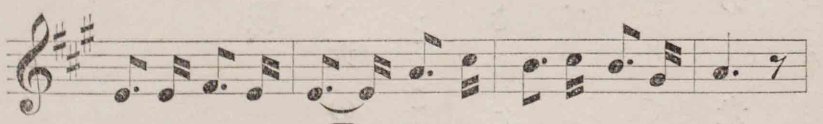
壯大ニ　　田村氏



5. 5 5. 5 | 6. 5 5. 3 | 4. 4 3. 2 | 1. 2 3 0 |
1. フブキノ　ナカノー　フントー　クセン
2. ロガリク　グンノー　ユーキハ　アサヒ



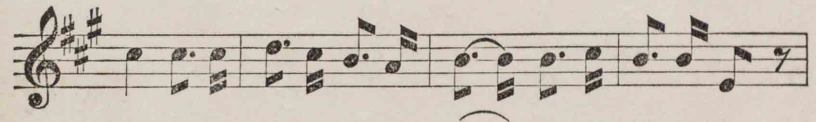
5. 5 1. 7 | 7 6. 5 | 4. 4 6. 5 | 5. 0 |
イサチハ　タカク　ホーテン　ノ
ササグル　ハタノ　ミシルシ　ノ



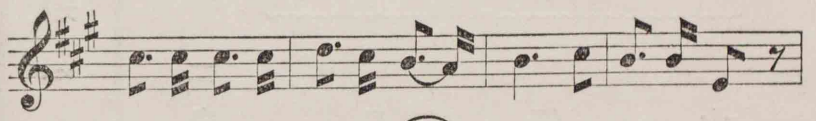
5. 5 6. 5 | 5. 5 1. 3 | 2. 3 2. 7 | 1. 0 |
カチドキ　トーコソ　ヒビキケ　レ
ムーカフ　トコロニ　テキハナ　シ

奉天會戰

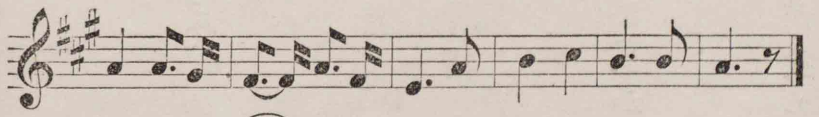
(つづき)



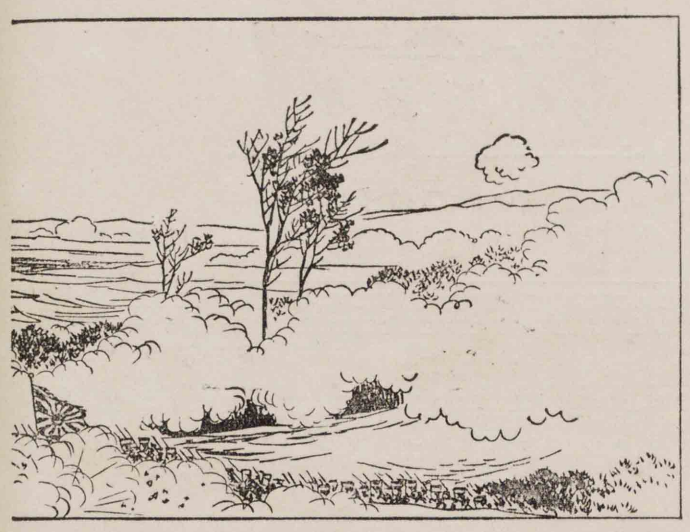
3 3. 3 | 4. 3 2. 1 | 2. 2 2. 3 | 2. 2 5 0 |
テキノ　タイグン　ナーカバ　ホロビ
タニノ　ホマレノ　セカイニ　メカク



3. 3 3. 3 | 4. 3 2. 1 | 2. 3 | 2. 2 5 0 |
タイセイ　ココニー　サゲマリテ
トドロキ　イデシー　ケッノヒーサ



1 1. 7 | 6. 6 1. 6 | 5. 1 | 2 3 | 2. 2 | 1. 0 ||
平和ノ　ヒーカリ　カガヤキソメ　ヌ
ウタヒ　ハヤサン　イツノヨマデ　モ

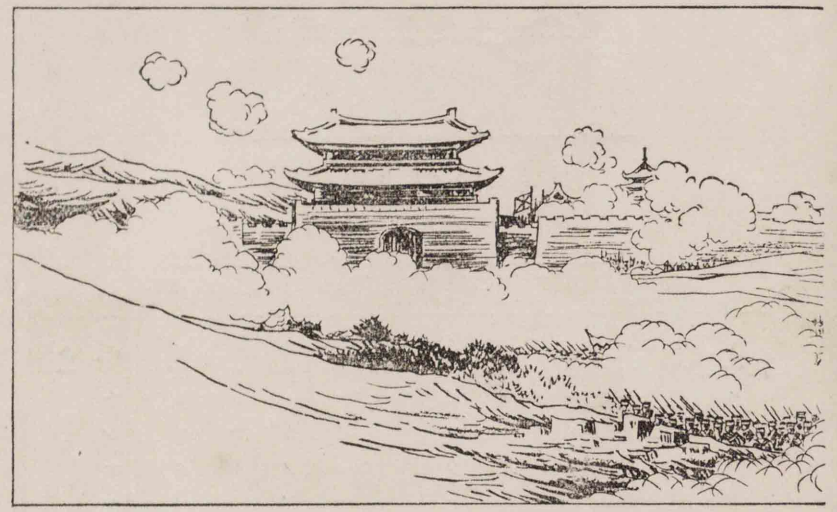


奉天會戰

蘆田氏

第一章

吹雪の中の奮鬪苦戰、
いさをは高く奉天の
かちどきとこそ
響きけれ。
敵の大軍、半ほろび、
大勢ここに定まりて、
平和の光、
輝きそめぬ。」



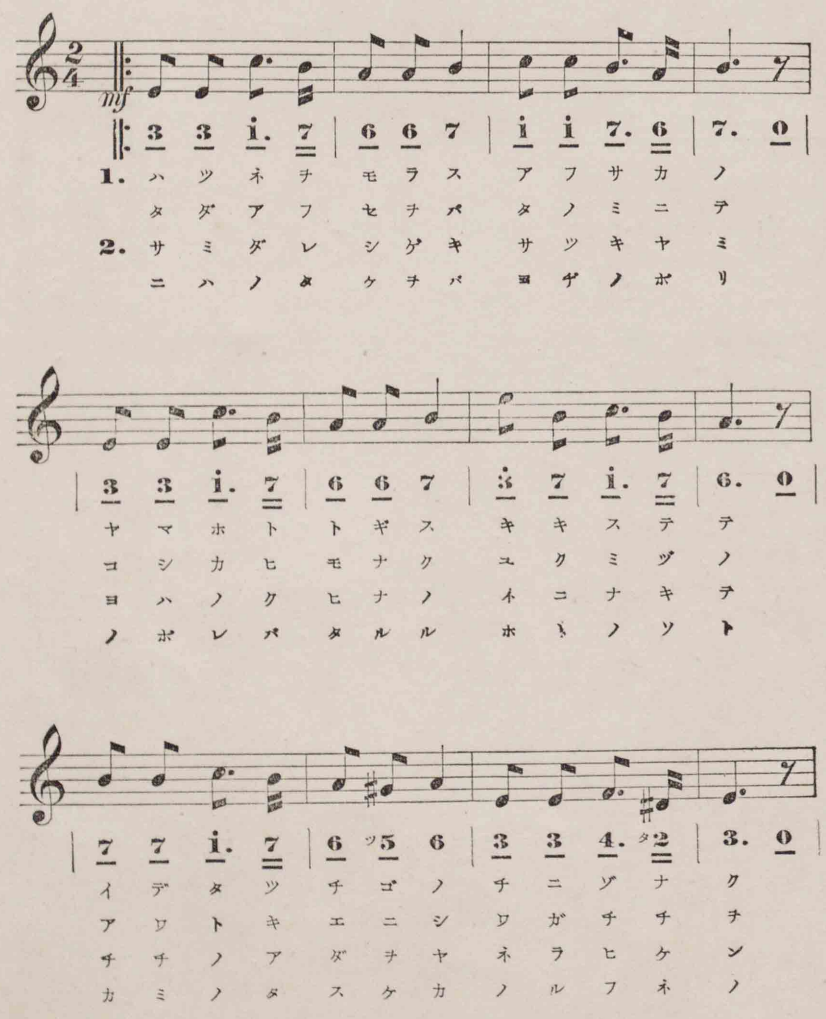
第二章

我陸軍の勇氣は朝日、
ささぐる旗のみしるしの
向ふところに
敵はなし。
國の譽の世界に高く、
とどろき出でし今日の日を、
うたひはやさん、
いつの世までも。』

阿新丸

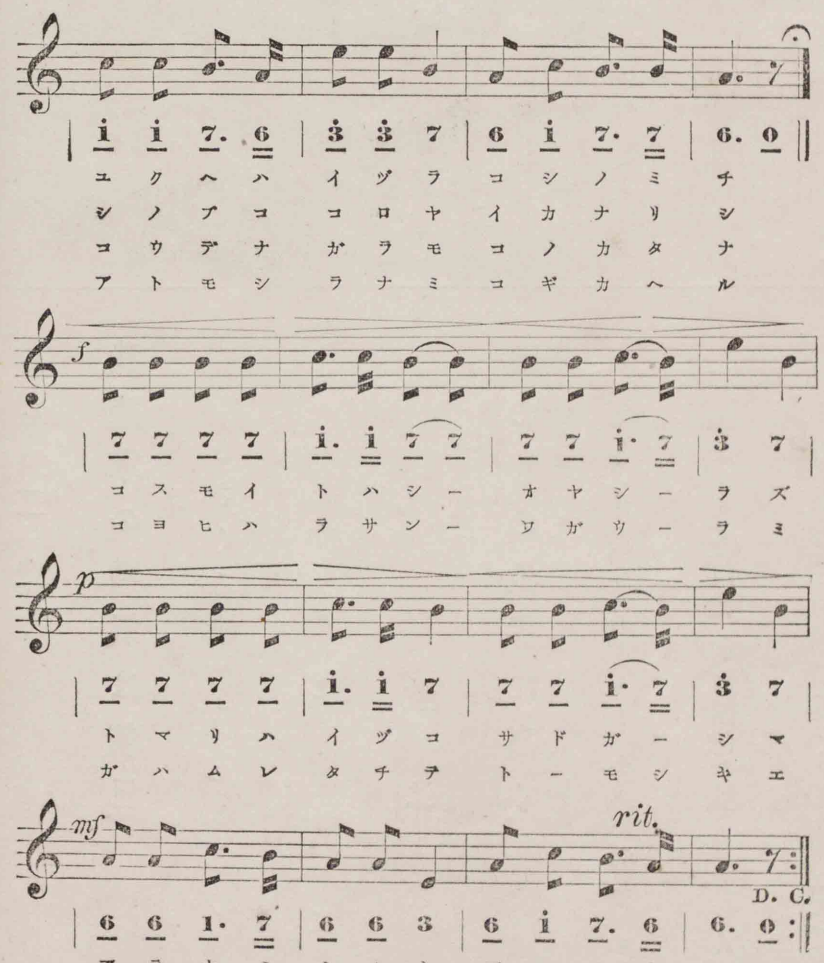
（子拍二調短い）

悲壯ニ　　小松氏



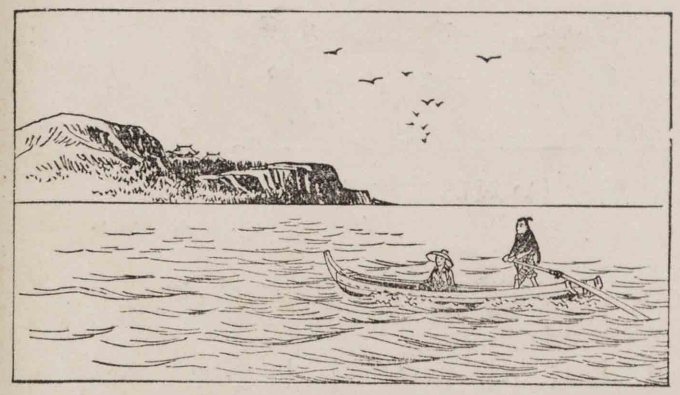
阿新丸

（つづき）



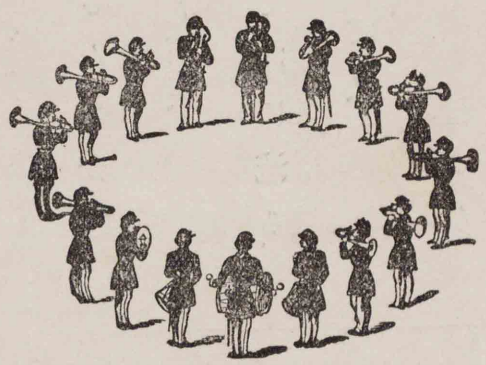
阿新丸 三

大橋氏



一、初音をもらす逢坂の、山時鳥ききすてて、
　出でたつ稚児の血にぞなく。
行方はいづら越の路、
　こすもいとはし親不知。
とまりはいづこ佐渡が島、
　荒浪遠き天の川。
ただ逢瀬をば頼にて、
　こしかひもなく逝く水の
泡と消えにしわが父を、
　忍ぶ心やいかなりし。」

二、五月雨しげき五月闇、
　夜半の水鶏の音に鳴きて、
父の仇をやねらひけん。
小腕ながらもこの刀、
　今宵、はらさん、わが怨。
蛾はむれたちて、ともし消え、
　枕はとびて、血に流る。
庭の竹をばよぢのぼり、
　上ればたるる湟の外、
神の助か、乗る船の
　あとも白浪漕ぎ歸る。」



大正三年五月廿七日印刷
大正三年五月三十日發行

高等小學唱歌第一學年
定價金貳拾五錢

著作者　大橋銅造
同　納所辨次郎
同　田村虎藏

發行者　東京市京橋區築地一丁目六番地　佐藤勝太郎
印刷者　東京市神田區雉子町三十四番地　綾部喜久二
印刷所　東京市神田區雉子町三十四番地　宮本印刷所

不許複製
著作權所有

發賣所
東京市日本橋區新右衞門町拾六番地
株式會社國定教科書共同販賣所

1900.7.17

広島大学図書
0130449462